宮城県営圃場整備関連 遺跡詳細分布調査報告書

(昭和55年度)

昭和 56 年 3 月

宮城県教育委員会

自然の豊かな宮城県には、有形、無形の貴重な文化財が数多く現存しています。なかでも埋蔵文化財は昭和55年12月現在で約5200箇所が周知されています。

しかし近年の急激な都市化の波に洗われ、その多くが消滅の危機に瀕しています。 しかも開発に伴ない、最も保存の危ぶまれるのは埋蔵文化財であることも事実です。 地域の開発と埋蔵文化財の保護、保存の調整は関係各機関と綿密な連絡のうえに実 施しているところであり、その効果が徐々にあらわれて各方面からの理解も得られる ようになってまいりました。

本報告書は農業基盤整備事業関連の3遺跡(色麻古墳群,千賀田遺跡,三代河原遺跡)の詳細分布調査と1遺跡(根岸遺跡)の記録保存調査を昭和55年度国庫補助事業として実施した結果をとりまとめたものであります。前者は圃場整備事業を実施するに当たり、文化財保護上の協議資料を得るためのものであり、後者は設計及び工法変更等によっても現状保存の調整のつかなかった部分について、記録保存の調査を実施し、その概略についてとりまとめたものであります。

この報告書が研究者及び関係者のみならず、広く一般の方々に活用され、文化財に付する理解が一段と深められるよう願ってやみません。

最後に、この調査に深い理解と多大の御協力をいただいた多くの方々に、厚く御礼を申しあげます。

昭和 56 年 3 月

宮城県教育委員会

教育長 北村 潮

目 次

| 序 | |
|-------------------------|--------------------------------------|
| はし | 〕めに |
| Ι. | 根岸遺跡 |
| ${\rm I\hspace{1em}I}.$ | 色麻古墳群57 |
| Ш. | 千賀田遺跡 |
| 三仁 | 弋河原遺跡 |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | 例 言 |
| 1. | 本書は県営圃場整備事業に関連する3遺跡の調査報告書である。 |
| 2. | 調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、関係各市町村教育委員会の御協力を |

- 3. 本書の作成に際し、嶋子町在住の沢口滋氏に漆器に関する助言を得た。
- 4. 本書における土色は「新版標準土色帳」(小山・竹原:1967)を使用し、土性については国際土壌学会の粒形区分を参照した。
- 5. この報告書に使用した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図の「丸森」、「川渡」、「中新田」である。
- 6. 執筆編集は文化財保護課が行なった。各遺跡の担当者は次のとおりである。

根岸遺跡遊谷正三色麻古墳群阿部恵千賀田遺跡

いただいた。

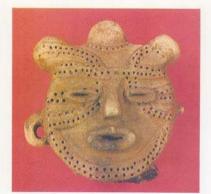
三代河原遺跡 土岐山 武



1. 籃胎漆器出土状況 (AR-101区)



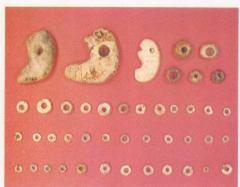
2. 籃胎漆器出土状況(AR-101区) 根岸遺跡出土遺物



3. 土 偶 (BF-101区)



4. 耳飾·小玉 (AS·AT-100区



6. 勾玉・小玉・臼玉



5. 櫛 (BA-100区)



7. 漆器 (AS-100区)



8. 朱 彩 土 器 根岸遺跡出土遺物

Iはじめに

宮城県教育委員会は、宮城県営圃場整備事業に係る3遺跡(色麻古墳群、千賀田遺跡、三代河原遺跡)の詳細分布調査と1遺跡(根岸遺跡)の記録保存のための調査を昭和55年度国庫補助事業として実施した。

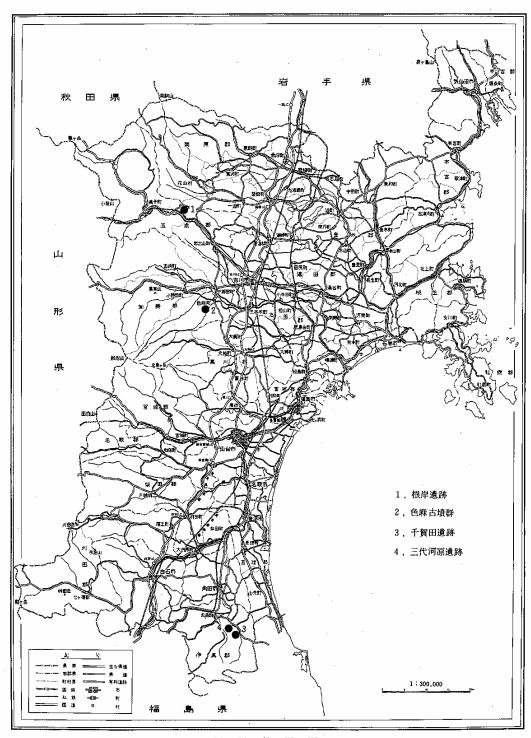
前者は、圃場整備事業を実施するに当たり遺跡保存のための協議資料を得ることを目的に遺跡の範囲、遺構の分布、遺跡の性格等を調査するものである。

後者は、協議により設計及び工法の変更等によってもなお現状保存のできかねた部分について記録保存の発掘調査を実施するものである。

色麻古墳群(上郷支群)は色麻町四釜地区の花川流域にある古墳時代後期から終末期にかけての群集墳であり、遺物包含地の広がりもある。圃場整備対象面積は906haでこの中に含まれる101基の古墳と19箇所の遺物包含地の保存資料を得るためにその一部について調査を実施したものである。調査の結果、No.7 は周涅の遺存もなく古墳であるとする確認はできなかった。田中後遺跡では平安時代の遺物を包含する広がりを確認し、集落跡の可能性が十分考えられたので協議の結果盛土施工により保存することになった。

千賀田,三代河原遺跡は丸森町大内地区の雉尾川流域の低位河岸段丘上と,丘陵麓部に営なまれた縄文後・晩期の遺物包含地である。この地区の圃場整備対象面積は299haでこの中に11遺跡が含まれ,うち4遺跡については54年まで詳細分布調査のうえ現状保存(石神遺跡・七夕西遺跡・塚田古墳)と一部記録保存(中平遺跡)をすることができた。千賀田・三代河原遺跡については設計の変更によって現状保存の可能性が大きいことを確認している。

根岸遺跡は岩出山町一栗地区の江合川右岸の低位段丘上の縄文時代後・晩期の遺構・遺物を含む遺跡である。この地区の圃場整備対象面積は323.2haで54年度まで263.6haの事業が終了し、55年度は59.6haが整備対象である。昭和54年度の詳細分布調査の結果をもとに関係部局間で再三にわたる協議を重ねその大部分は設計の変更等で保存することになったが、排水路部分については記録保存の発掘調査を実施することになったものである。調査の結果、良好な遺物包含層の広がりが確認され、排水路の周囲は工法の変更により盛土し保存することになった。



遺 跡 位 置 図

I 根 岸 遺跡

調査要項

遺跡所在地:宮城県岩出山町池月字根岸清水前6ほか

調査主体者:宮城県教育委員会

調查担当者:宮城県教育庁文化財保護課

調査員:阿部 博志・太田 昭夫

澁谷 正三・菊地 淳一

丹羽 茂・小井川和夫

加藤 道男・阿部 恵

新庄屋元晴·黒川 利司

調 査 期 間:昭和55年7月7日~12月2日

調査対象面積: 960 m² 実発掘面積: 960 m²

遺 跡 記 号: FT (宮城県遺跡地名表登録番号 35063)

協力機関:岩出山町教育委員会

目 次

| I | 遺跡 | の位置と環境 | 5 |
|-------|-----|--------|----|
| Π | 調査 | の方法と経過 | 8 |
| Ш | 調査 | の成果 | 11 |
| 1 | 遺物的 | 包含層 | 11 |
| 2 | 発見 | された遺構 | 14 |
| | (1) | 配石遺構 | 14 |
| | (2) | 土壙 | 18 |
| | (3) | 埋設土器 | 21 |
| | (4) | 石囲炉 | 25 |
| | (5) | 遺構について | 26 |
| 3 | 出土 | 遺物 | 28 |
| IV | まと | Ŀ め | 32 |

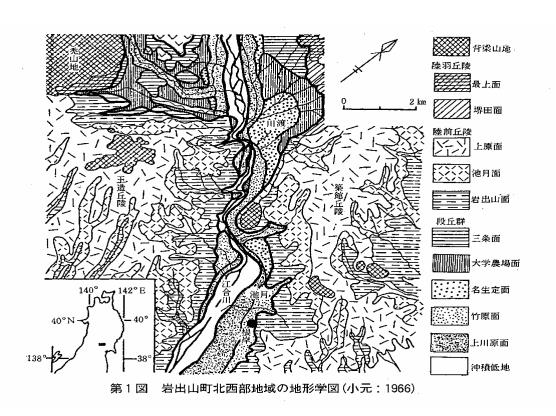
I 遺跡の位置と環境

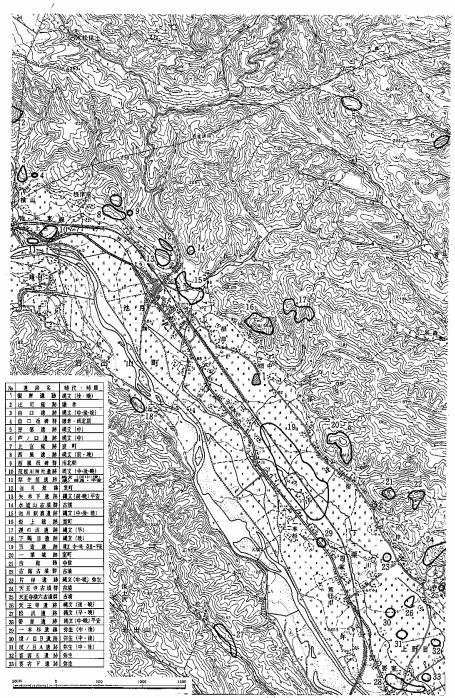
1 位置と自然環境

根岸遺跡は玉造郡岩出山町池月字根岸清水前に所在し、池月駅から北東1kmの地点に位置する。

岩出山町周辺の地形を概観すると、西には奥羽山地の一部をなす禿山地が、南には玉造丘陵が、北には築館丘陵が横たわっている。また、これらの丘陵間には河岸段丘が発達している。河岸段丘は荒雄岳に源を発する江合川や、その支流によって形成されたもので、形成された順に三条面、大学農場面、名生定面、竹原面、上川原面の5群が認められている(小元:1966)。これらの段丘の分布状況をみると、嶋子町では5群の段丘が江合川両岸に広範囲に認められるが、岩出山町に入ると名生定面、竹原面、上川原面の3群が認められ、その範囲は縮小してくる。また、池月以東では竹原面、上川原面の2群が認められ、これらは特に江合川右岸に発達が著しい。

このように、この地域は丘陵や河岸段丘で大半が占められている。





第2回 遺跡の位置と周辺の遺跡(国土地理院発行1/2万5千「川波」を複製)

本遺跡は江合川右岸に発達する河岸段丘の竹原面上に立地している。遺跡周辺の微地形を見ると北から南に緩やかに傾斜しているが、東側に浅い沢が形成され、本遺跡は、この沢の出口西側に位置している。標高は約78~80m、現状は水田である。

2. 周辺の遺跡

江合川両岸に形成された河岸段丘及び玉造丘陵の南東部, 築館丘陵の南部には, 旧石器時代から近世にわたって, 多くの遺跡が分布している。

旧石器時代の遺跡としては、昭和51年に発掘調査がなされた座散乱木遺跡をはじめ、宮城平遺跡、三太郎山遺跡などがあり、県内でも旧石器時代の遺跡が集中して分布していることで知られている。これらの遺跡は丘陵の頂部や斜面に立地している。微隆起線文土器が採集された座散乱木遺跡では、有舌尖頭器や彫刻刀形石器、ナイフ形石器などの他に日本最古の動物形土製品が出土し(石器文化談話会:1978)、注目されている。

縄文時代の遺跡としては、座散乱木遺跡(早・前・晩)・遅の沢遺跡(早)・玉造遺跡(中・晩)、天王寺遺跡(晩)などが知られている。座散乱木遺跡や遅の沢遺跡は丘陵斜面に、玉造遺跡や天王寺遺跡は河岸段丘上に立地している。座散乱木遺跡では早期末の竪穴住居跡が1軒検出されている(同上)。また、玉造遺跡では中期末大木10式期に属する竪穴住居跡が4軒検出され、これらの大半が住居跡内に複式炉を有していることが明らかにされた(千葉:1980)。

弥生時代の遺跡としては、片岸遺跡(中・後)、一本杉遺跡(中・後)、九十九沢遺跡(後)、 西天王寺遺跡(後)などが知られている。九十九沢遺跡・西天王寺遺跡など多くの遺跡は、玉 造丘陵南東部斜面や築館丘陵南部に立地しているが、片岸遺跡や一本杉遺跡などは河岸段丘上 に立地している。片岸遺跡では桝形囲式、十三塚式に属する土器片(佐藤・藤原:1980)が、 西天王寺遺跡では天王山式系に属する土器片(県教委:1978)が採集されている。

古墳時代から奈良・平安時代の遺跡としては、座散乱木遺跡(古墳前・奈良・平安)、木戸脇裏遺跡(古墳前・奈良・平安)、玉造遺跡(平安)などがある。この時期になると殆んど多くの遺跡は玉造丘陵南東部及び築館丘陵南部に分布する傾向が窺え、しかも縄文時代・弥生時代の遺跡と複合して存在するものが目立つ。河岸段丘上に立地する数少ない遺跡の中でも玉造遺跡では平安時代表杉ノ入式期に属する竪穴住居跡が5軒検出され、集落跡の一端が明らかにされた(千葉:1980)。また、築館丘陵南部には古墳が群をなして密集しているが、中でも推定数百基の規模をもつと考えられる川北横穴古墳群や古館古墳群、水道山古墳群などが知られている。

中世の遺跡としては、古館跡・岩上館跡・一栗城跡などが知られている。

Ⅱ 調査の方法と経過

一栗地区の県営圃場整備事業が本遺跡の所在する地区に及ぶこととなったため、54年度に遺跡の範囲確認とその内容把握を主な目的として調査を実施した。その結果、遺跡は南北160m、東西100mの範囲に及ぶことが分かり、また縄文時代晩期の遺物の出土を見るとともに配石遺構等が確認された(澁谷:1980)。

今回の調査は圃場整備事業に伴う排水路が本遺跡内に設けられることになり、その排水路部分について実施したものである。その位置は遺跡全体のほぼ中央からやや北寄りにあたる。

(1) 調査地区の設定

排水路は本遺跡のほぼ中央を南東から北西方向に設けられるものと、それに直交し北東方向に設けられるものがある。そこで、南東から北西方向に設けられる排水路の中心線と、それに直交し北東方向に設けられる排水路の中心線を軸線として対象地区全体に 3m単位でグリッドを組んだ。グリッド名は南東―北西軸をアラビア数字、南西―北東軸をアルファベットで表わした。また、調査地区を便宜上4区に分け、BQ・BR―100・101区を基点として北東側を北区、北西側を西区、北区と西区の直交する付近を南区、南東側を東区とした。

(2) 調査の経過

調査は、昭和55年7月7日に開始した。調査対象面積は約960 m2である。

基本層位は54年度の調査で明らかになっていた。そこで調査は重機及び手掘りで、北・西・南・東区の順に表土から第V層までの堆積層を掘り下げた。

その結果、北・東区では表土下約20~30 cmで、西・南区では表土下約60~70 cmで54 年度に確認された第VI層を確認し、遺物の散布が認められた。また、南区で54 年度に確認した配石遺構3 基を第VI層上面で再確認した。

その後の調査は第VI層、配石遺構の性格及び内容把握を目的として精査を続け、さらにそれに併行して他の遺構の検出に努めた。

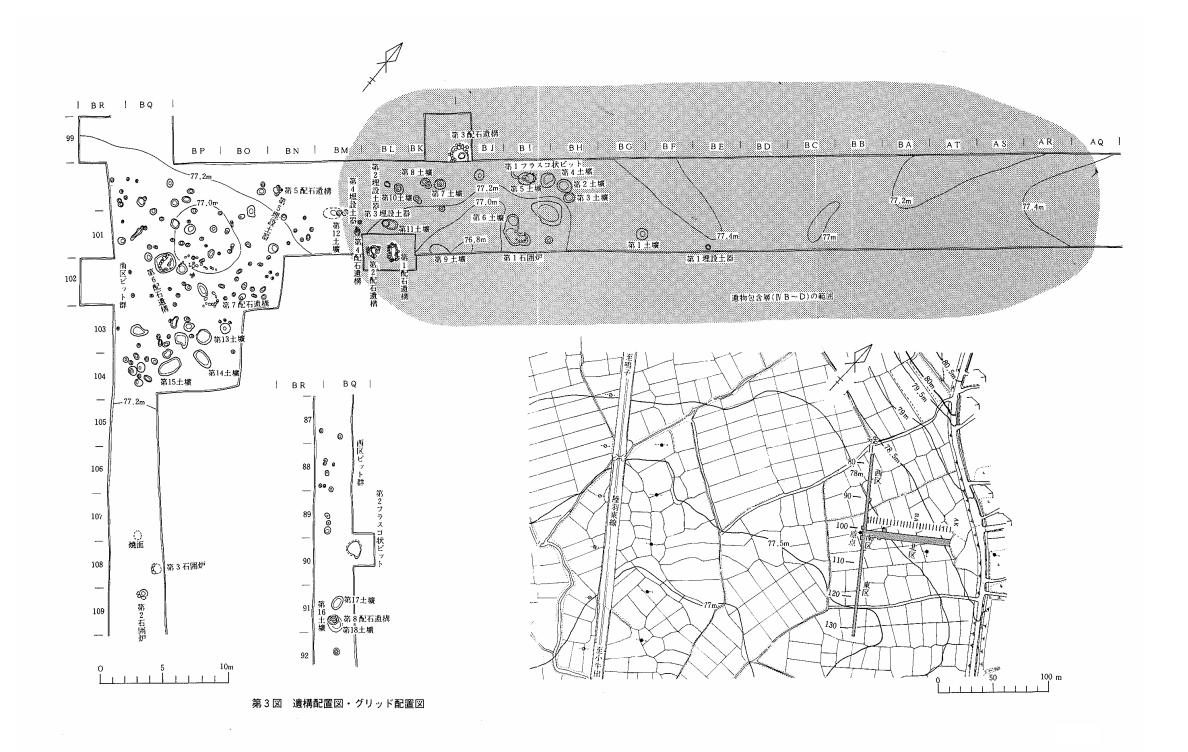
その結果,第VI層は良好な遺物包含層であることが確認され,遺構については北・南・西区で新たに配石遺構6基が発見された。さらに土壙,埋設土器,石囲炉,フラスコ状ピット,焼面,ピット群などが発見された。

また、遺物包含層からは多量の縄文土器、石製品、土製品の他に、骨角器、藍胎漆器・櫛等の漆器が出土した。

10月18日には以上の調査の成果を公表するために、現地説明会を開催した。

なお、北区で検出された配石遺構3基については、排水路のやや外側に位置していることから、遺構の底面まで掘り下げたのち埋め戻しを行ない保存することにした。

調査は, 12月2日をもって終了した。発掘面積は960 m²である。



Ⅲ 調査の成果

1 遺物包含層 (第4~6 図)

今回の調査で確認された基本的な層位は、大別して8層である。第 I 層から第 V 層については、54年度の調査で明らかにされている。すなわち、第 I 層は表土で厚さ 20~30 cmを計る。第 II 層から第 V 層は北区の北・南端、西区、南区、東区の一部に分布し、西から東に緩やかに傾斜している。第 VII 層は遺物包含層である。第 VII 層は、北・西区に分布し北区では北から南に傾斜し、西区では西から東に緩やかに傾斜している。遺物を僅かに含み、出土遺物などから大洞 B 式かそれ以前に形成されたものと考えられる。第 VIII 層は地山である。

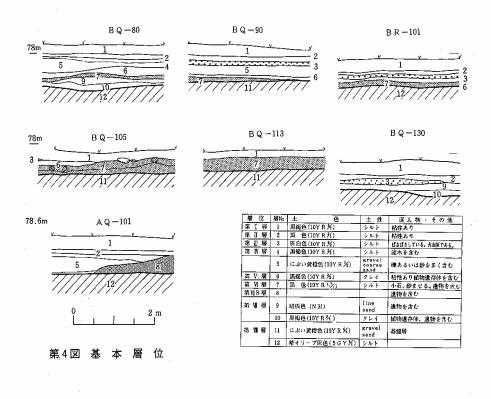
遺物包含層(第VI層)は第VIA~VID層の4層に大別された。

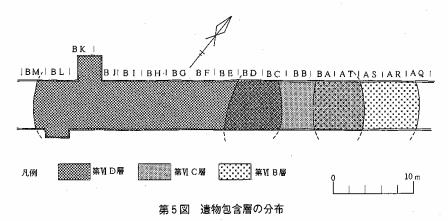
第VIA層は北区の中央部以南、西、南、東区において分布し、厚さ5~50 cmある。わずかに南に傾斜する。遺物が層理面に対して不規則に傾斜していること、また縄文時代晩期大洞BC~A'式に属する遺物が混在して出土していることから2次堆積したものと思われる。ただし、層上面で大洞A'式期と考えられる配石遺構、埋設土器、土壙が確認されていることや出土遺物の所属時期からみて、層の堆積時期は大洞A'式かそれに近い時期と考えられる。

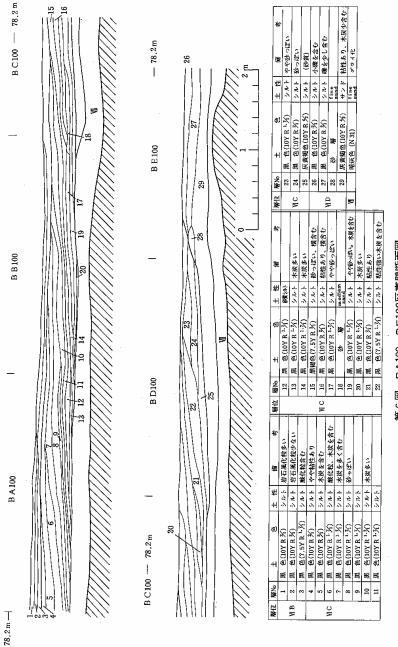
第VIB層は北区の北端に分布し、厚さは約70 cmある。BE—100・101 区で第VIC層直上に形成され、北に急傾斜する。層は10数枚に細別される。遺物は第VIB層最下層で一括及び完形土器が多いが、その他の層ではあまり出土しなかった。同層出土の土器は、細別された層でみると上部の層では大洞A、下部の層では大洞A式に属するものであり、本来第VIB層は2つに大別されるものと考えられるが、発掘時にそれを明確にできなかった。土器以外に石製品、土製品、漆器などが出土している。

第VIC層は北区の北側から中央部に分布し、厚さは約50 cmある。BE-100・101 区の北側で第VID層直上に形成され、北に急傾斜する。層は10数枚~20枚に細別可能である。遺物は層理面に沿って出土し、一括及び完形土器が多量に出土している。これらの土器は大洞C₂式に属するものである。その他に石製品、土製品、漆器などが出土している。

第VID層は北区の中央部に分布し、厚さは約 $40\,\mathrm{cm}$ ある。中央東側が最も高く、周辺に向かってゆるやかに傾斜し、縁辺では傾斜が急になる。層は $5\sim6$ 枚に細別される。遺物は層理面に対し規則正しい傾斜をもち、一括及び完形土器が多量に出土している。これらの土器は大洞 C_1 式に属するものである。







第6図 BA100~BE100区東壁断面図

2 発見された遺構

調査の結果、配石遺構・土壙・埋設土器・石囲炉・フラスコ状ピット・焼面・ピット群が検 出された。ここでは、配石遺構・土壙・埋設土器・石囲炉について述べることにする。

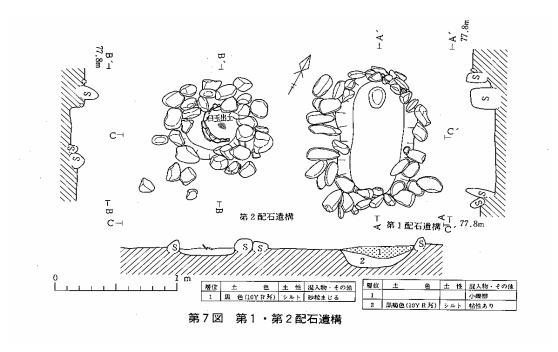
(1) 配石遺構

配石遺構は北区で5基、南区で2基、西区で1基の合計8基が認められた。なお、南区の配石 遺構は54年度に3基確認しているが、調査の結果、配石遺構として認められるのは2基である ことが判明した。

第1配石遺構

確認面: BL-101~102 区に位置し、第VIA層上面で確認された。

規模・構造:土壙の周縁・内壁に配石を伴うものである。土壙の平面形は楕円形を呈し、長軸約1.1×短軸0.6mの規模である。壁は緩やかに立ち上がり、深さは20cmを計る。底面は平坦である。配石には河原石が用いられ、その大きさは10~25cmのものが多い。これらは土壙周縁約30cmの範囲に配され、土壙の長軸に対して平行な周縁では、河原石を長軸に直交するような向きで据えており、その短軸に対して平行な周縁及び内壁では、壁に立てかけている。さらに、土壙長軸の北西壁手前に人頭大の河原石を立てている。土壙内堆積土は2層認められ、第1層は小礫層であり土壙の中央に向かうにつれ厚く堆積している。これは遺構周辺には認められず、しかも、小礫のみであることから土壙の上部構造であった可能性が強い。遺構に伴うと考えられる遺物としては、堆積土から出土した朱塗りの土製小玉が1点ある。



第2配石遺構

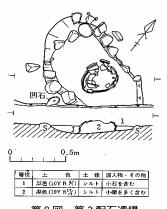
確認面: BL-101~102 区に位置し, 第1配石遺構から西へ約30 cmの距離にある。第VIA 層上面で確認された。

規模・構造:土壙の周縁・内壁に配石を伴うものである。土壙の平面形は円形を呈し、径0.5 mの規模である。壁は緩やかに立ち上がり、深さは8cmある。底面はほぼ平坦である。配石に は河原石が用いられ、その大きさは約10~20 cmのものが多い。これらは土壙周縁約60 cmの範 囲内にあり、土壙の平面形に沿って円形に密に配されている。また、土壙中央の底面から約8 cm上位から土器が検出されている。土器は逆位の状態で検出され、口縁部の約1/3残存している。 土壙内堆積土は1層認められる。遺構に伴うと考えられる遺物としては、底面から出土した臼 玉が9点ある。

第3配石遺構

確認面: B J・B K-99・100 区に位置し, 第VIA層上 面で確認された。

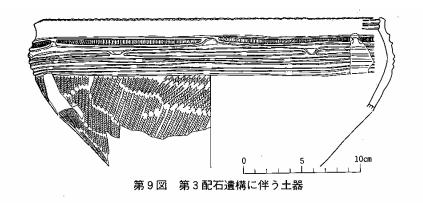
規模・構造:土壙の周縁・内壁に配石を伴うものである。 土壙の平面形は楕円形を呈すると思われるが、排水及び層 観察のために設けたトレンチのために、東端は削平されて いる。そのため、長軸は不明だが短軸は60 cmを計る。壁は 緩やかに立ち上がり、深さは約10cmある。底面は平坦であ る。配石には河原石が用いられ、その大きさは10~20 cmの ものが多い。土壙周縁には約10cmの範囲内にまばらに配さ れ、土壙内壁には寄りかけて密にみられる。



第8図 第3配石遺構

十壙内堆積十は1層認められる。

土壙のほぼ中央の位置に土器を配置している。土器は土壙の底面に接して逆位の状態で検出 された。土器内埋土は1層認められ、小礫を多く含んでいる。土器(第9図)は底部を欠損し

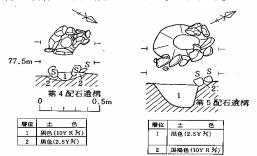


ている。体部は外傾し、肩部で内弯しながら直立する頚部に至り、口縁部が外反する大形の浅鉢形土器である。口縁部上端には等間隔に刻目が施されている。口頚部の外面は研磨され、口縁部の内側には2条の平行沈線が施されている。文様が集中して施される肩部には、 π 字状文および刺突が交互に、さらに π 字状文下に3条の平行沈線文が施されている。体部には斜行縄文 (LR) が横位に施されている。所属時期は文様の特徴から大洞A'式と考えられる。

第4配石遺構

確認面: BM-101 区の東側に位置し, 第 VII層上面で確認された。

規模・構造:土壙の周縁に配石を伴うものである。土壙の平面形は不整の円形を呈し、径約15cmの規模である。壁は緩やかに立ち上がり、深さは約5cmある。配石は河原石が用いられ、10~20 cmの石を主に用い、それらの



間をうめるように5~8 cmの小石が配されている。これらは土壙周縁約10 cmの範囲に円形に配されている。配石下に掘り方が認められる。土壙内堆積土は1層認められる。

第5配石遺構

確認面: BM-100 区の南側に位置し、地山上面で確認された。

規模・構造:土壙の周縁に配石を伴うものである。土壙の平面形は楕円形を呈し、長軸約45 ×短軸35 cmの規模である。壁は南側がなだらかに立ち上がり、北側ではほぼ垂直に立ち上がる。深さは約25 cmである。配石には河原石が用いられ、10~15 cmのものが多い。これらは土壙の北側から東側にのみ認められ、壁に沿って楕円形に配されている。土壙内堆積土は1層認められる。

第6配石遺構

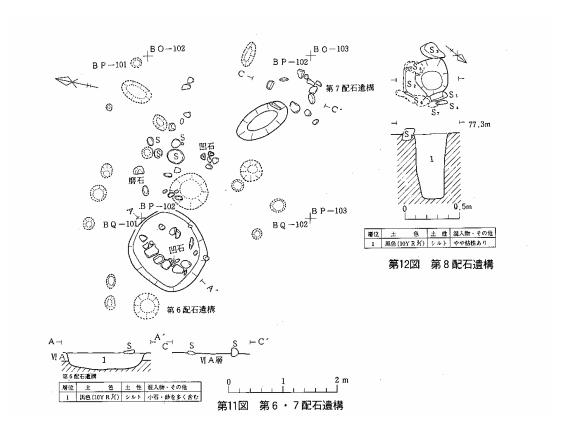
確認面:BQ-101・102区の位置にあり、第VIA層上面で確認された。

規模・構造:土壙上面に配石を伴うものである。土壙の平面形はほぼ円形を呈し、径約 1.4 mの規模である。壁は急傾斜で立ち上がり、深さは30 cmを計る。配石には河原石が用いられ、10~20 cmのものが多い。これらは角ばっているのもあるが、多くは扁平なものを用い、土壙堆積土上面の土壙の輪郭より内側に楕円形に配されている。

第7配石遺構

確認面: BP-102・103 区に位置し、第VIA層上面で確認された。

規模・構造:土壙の端に接して配石を伴うものである。土壙の平面形は楕円形を呈し長軸約1×短軸0.6mの規模である。壁は急に立ち上がり、深さは20cmを計る。底面は平坦である。



これらは据えただけのものと直立した状態で配されるものがある。土壙内堆積土は1層認められる。配石には約20cmの大きさの河原石が用いられ、土壙上面東端から外側に円形に配されている。

第8配石遺構

確認面:BQ-91区の南側に位置し、地山上面で確認された。

重複:第18土壙を切っている。

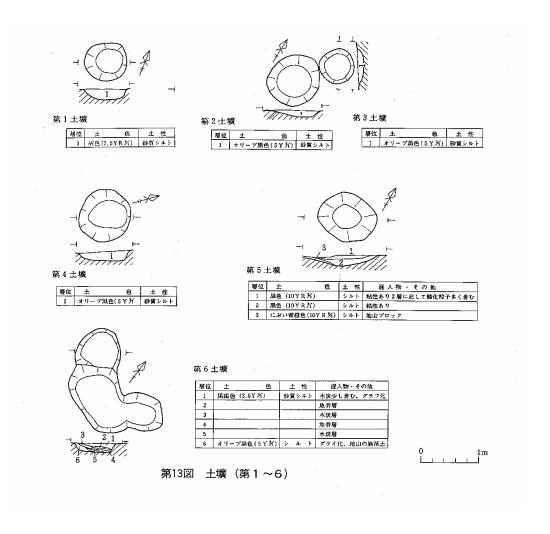
規模・構造:土壙の周縁に配石を伴うものである。土壙の平面形は円形を呈し、径約30 cmの規模である。壁は垂直に立ち上がり、深さは60cmを計る。底面は平坦である。配石には河原石が用いられ、土壙の周縁約10 cmの範囲に「コ」の字形に配されている。河原石 S_1 ・ S_2 ・ S_6 は同一の石で、打ち欠いて3つに分けたと考えられる。土壙内堆積土は1層認められる。

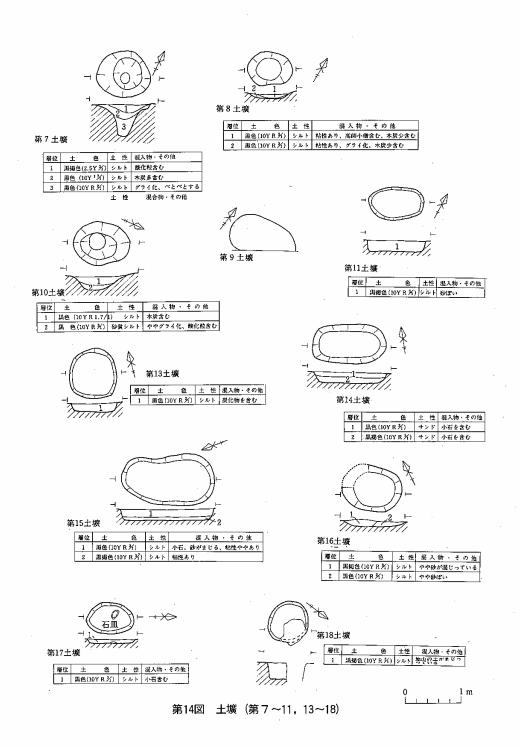
(2) 土壙

土壙は、北区 (BF~BM—100・101 区) で12 基、南区 (BP—104、BQ—101~104 区) で3 基、西区 (BQ—91 区) で3 基の計18 基検出された。ここでは、その平面形・規模・構造・出土遺物全般について概要を述べることにし、個々の土壙については第1表にまとめることにする。

平面形: 円形, 不整の円形, 楕円形があり, 特に楕円形が多い。

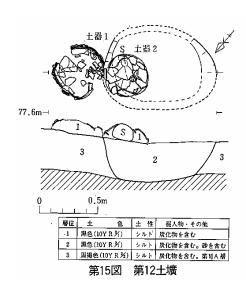
規模・構造:円形では最大径が0.9m,最小径が0.5m,楕円形では長軸の最大が1.7m,最小が0.8m,短軸の最大が0.9m,最小が0.6mの規模である。壁の立ち上がりは殆んどが緩やかであるが、中には急なものもあり、底面は平坦なものが多い。深さは $10\sim60~cm$ の範囲内におさまる。堆積土は1層のみ認められるものが多いが、中には $2\cdot3\cdot6$ 層認められるものもあ





る。これらの大部分は堆積土の状況から,人為的に埋められたものと思われる。遺構に伴うと考えられる遺物としては,第10土壙の堆積土から有孔石製品2点,第12土壙の堆積土から臼玉15点,土製の小玉2点,第17土壙底面から石皿1点がある。

なお,第 12 土壙ではその堆積土上面及び土壙に接する外側に,2 個の浅鉢形土器が検出された。 土器は逆位の状態で確認され,土器2の内側には 径約20cmの河原石が置かれていた。土器1(第16 図1)は4つの脚を持つもので,底部を欠損して



第16図 第12土壌に伴う土器

いる。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部が直立する大形の浅鉢形土器である。口縁端部には、頂部が円盤状を呈する突起が4つ等間隔に付き、さらにそれらの突起間には山形状小突起が二つずつ配置されている。口縁部外面には、円盤状突起下に彫去による三角状の文様が、その下に π 字状文が施されている。口縁部内面端部には、一条の沈線が施されている。体部下端から底部には平行沈線による文様が施され、その延長が脚にまで及んでいる。なお、口縁部内外および体部下端の沈線に丹塗の痕跡が認められる。土器2(第16図2)は4つの脚をもつもので、底部を欠損している。体部は外傾しながら立ち上がり、肩部でふくらみ、口縁部が内弯する大形の浅鉢形土器である。口縁部外面は研磨され、その内面には一条の沈線が施されている肩部には平行沈線及び π 字状文が施されている。体部下端から底部には π 字状文が施される。その延長が脚にまで及んでいる。なお、口縁部内面の沈線及び肩部の平行沈線に丹塗の痕跡が認められる。所属時期は文様の特徴からともに大洞A、式と考えられる。

| 調査区 | 位置 | 位置・確認面 | 平面形 | 规 模 (m) | 深さh) | 壁の立ち上がり | 庭面 | 堆積土 | その他 |
|-----|-----|----------------------------|-------|--------------|------|----------------|------|-------|---------------------------------|
| | 1 | BF・BG-100 第四層下地山上面 | 円 形 | 径0.7 | 20 | 西- 観やか 東一 ② | 平担 | 1 💥 | |
| | 2 | BH-100 第12番 F地山上面 | 円 形 | 径0.6 | 10 | 被やか | 平坦 | 1 模 | |
| | 3 | BH-100 第14層下地山上面 | 円 形 | 径0.9 | 10 | 极やか | 平班 | 1₩ | |
| 北 | 4 | 男H・BI ― 100 第142番F地山上面i | 円 形 | 徭 0.5 | 20 | 第一級や窓 | 平坦 | 1㎏ | |
| | 5 · | 第1 一100 | 榕円形 | 長帕1×短帕0.85 | 20 | 极やか | 級〈預約 | 3 144 | |
| | 6 | BI-101 3XVIAV下地山上面 | 不整の円形 | 後0.8 | 16 | 28 | 平坦 | 6 日 | 自然堆積 |
| | 7 | BK-100 3641144上面 | 不整の円形 | 径 i | 60 | 急→綴やか | 平坦 | 3層 | |
| | 8 | BK-100 然VIM上面 | 格円形 | 長軸0.8×短軸0.6 | 10 | 极やか | 平坦 | 2 瞬 | |
| lx. | 9 | BL-100 郊延崎下地山上面 | 桁 円 形 | | | | | | • |
| IX. | 10 | BK ─ 101 第141 举上置 | 格 円 形 | 長輔1×短軸0.8 | 25 | 总 | 平川 | 2 Mi | 有孔石製品2点 |
| | 11 | 任 - 101 第 W 房 下地山上面 | 格円形 | 長軸1×短軸0.6 | . 20 | .0 | 平肌 | 1 49 | |
| | 12 | BM-101 20VIAM中 | 格円形 | | 35 | .55 | 平坦 | 1 10 | 臼玉15点、小玉2 点、土器2個体、 サメの備1点 |
| | 13 | BP−103 第VIA-WFF地山上面 | 不整の円形 | 径0.8~0.9 | 15 | .8 | 平坦 | 1 14 | |
| 南 | 14 | 日P~104 第VIAMFド地山上道 | 桁 円 形 | 長軸1.3×短軸0.7 | 20 | 穏やか | 平担 | 2 🚧 | |
| IX. | 15 | BP·BQ-104 第VIAW下地山上面 | 格 円 形 | 技帕1.7×短帕0.9 | 20 | Ð | 平坦 | 2 桜 | |
| 195 | 16 | BQ−91 第ⅥA₩下地山上面 | 楕 円 形 | 長帕1.1×短軸0.8 | 10 | 観やか | 平班 | 2₩ | 第18土拡に切ら れている |
| K | 17 | BQ-91 新VIAMFF地山上面 | 格円形 | 及帕0.85×短帕0.6 | 10 | ねゃか | 平水 | 1₩ | 石皿1点 |
| , X | 18 | BQ-91 第VA 海下地山上通 | 不整の円形 | 径 0.75 | 30 | £. | 平坦 | 1場 | 第6上拡を切っ でいる |

第1表 土 壙

(3) 埋設十器

埋設土器は北区にのみ分布し、計5基検出されている。

第1埋設土器

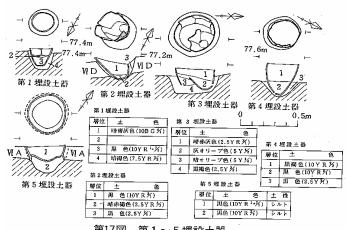
BL―101 区の南側に位置し、地山上面で確認された。土器は正位の状態で検出され、土器よりやや大きい掘り方が認められた。土器の周辺には、7×10 cmの大きさの河原石および石のぬき取り痕と思われるくぼみがある。堆積土は3層認められ、第2層中には焼土が、第3層中には多くの炭化物が含まれている。

土器 (第18図1) は口縁部を欠損している。体部下端で直立し、体部下半から体部上半にかけて外傾する深鉢形土器である。体部外面は無文である。

第2埋設土器

B L-100 区の中央に位置し, 第VID層中で確認された。土器 は正位の状態で検出され、土器 よりやや大きい掘り方が認めら れた。十器の底部は、掘り方の 底面に接している。 堆積土は 2 層認められた。第2層は焼土で あるが、第1・2層とも木炭が僅 かに含まれている。

土器 (第18図2) は口縁部を



第17図 第1~5埋設土器

欠損している。 体部が外傾しながら立ち上がる深鉢形土器である。 体部外面には結束しない羽 状縄文(LR・RL)を施している。体部下端は研磨されている。

第3埋設土器

BL-101 区の北側に位置し地山上面で確認された。第11 土壙の西側を切っている。土器は 正位の状態で検出され、土器よりやや大きい掘り方が認められた。堆積土は3層認められ、北 側に傾斜しながら堆積している。第3層には骨片,木炭が少量含まれている。

土器 (第19図3) は口縁部を欠損している。体部下半から体部中央にかけて外傾しながら立 ち上がり、体部上半でやや内傾する深鉢形土器である。体部外面には結束しない羽状縄文(L R・R L) を施している。また、綾絡文が認められるが、これは縄文原体LR、R Lの末端に Rの紐を右巻きにして2回巻きつけて結わえたため、原体を回転させた時に羽状縄文と同時に 施文されたものである。体部下端は研磨されている。

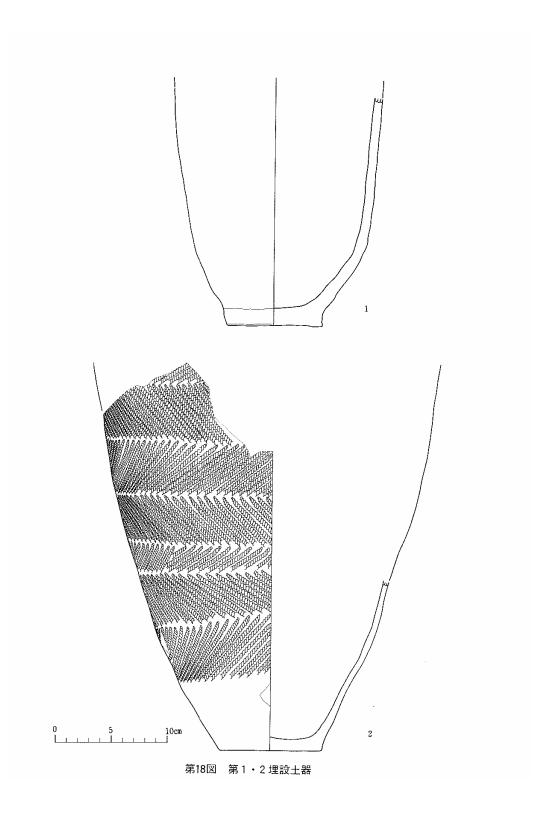
第4埋設土器

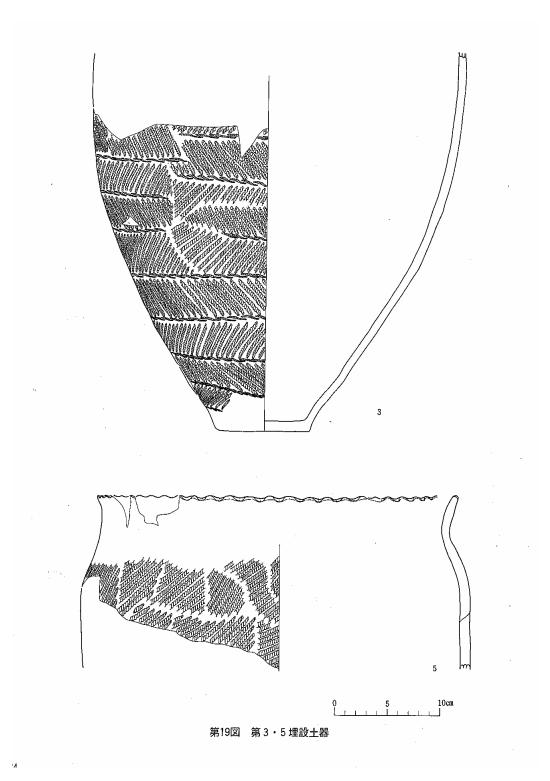
BM-101 区の北側に位置し、第VII層上面で確認された。土器は第VID層を掘りこんで埋設 されたと思われ、正位の状態で検出された。掘り方は土器よりやや大きい。堆積土は2層認め られ水平に堆積している。第2層には骨粉が僅かに含まれる。

土器は口縁部を一部欠損している。体部下半から体部上半にかけて外傾しながら立ち上がり、 口縁部が内弯する深鉢形土器である。所属時期は大洞C」式と思われる。

第5埋設土器

BN-101 区の西側に位置し、第VI層上面で確認された。土器は逆位の状態で検出された。掘 り方は地山上面で認められた。また、土器頚部の位置に別個体の土器片が敷きつめるような状





態で検出された。堆積土は土器頚部を境に2層に分かれる。

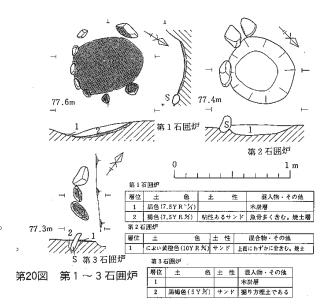
土器 (第19図5) は体部下半から底部を欠損している。体部上半がほぼ直線的に立ち上がり口頚部が「く」の字状に外反する深鉢形土器である。口縁端部は小波状を呈している。口縁部から頚部にかけて研磨され、体部上半には斜行縄文(LR)が横位に施されている。

(4) 石囲炉

石囲炉は北区で1基,東区で2基の計3期検出されている。

第1石囲炉

BI―101 区の南側に位置し、第VII 層上面で確認された。平面形は円形を呈し、径約60cmの規模である。石は9個あり、火熱を受けて石の内側が赤変しているのもある。堆積土は2層認められ、第1層には木炭が多量に含まれ、第2層は魚骨を多量に含む焼土である。掘り方は不明である。



第2石囲炉

BQ-109 区の西側に位置し、地山上面で確認された。平面形は円形を呈し、径約70 cmの規模である。石は3個残存している。堆積土は1層認められ、焼土である。焼土上面には、僅かに骨が含まれている。掘り方は認められない。

第3石囲炉

BQ-108 区の中央に位置し、地山上面で確認された。残存部が西側の半分しかないが、平面形は円形を呈し、径約50 cmの規模と思われる。石は3 個残存しているが、そのうち2 個は、火熱を受けて赤変している。堆積土は1 層認められ、木炭が薄く堆積している。掘り方は石にのみ認められる。

(5) 遺構について

ここでは性格の明らかにされていない配石遺構・土壙・埋設土器について、その所属時期・ 規模・構造・出土遺物・分布などの特徴及び共通点をまとめ、考察を加えることにする。 所属時期は次の通りである。

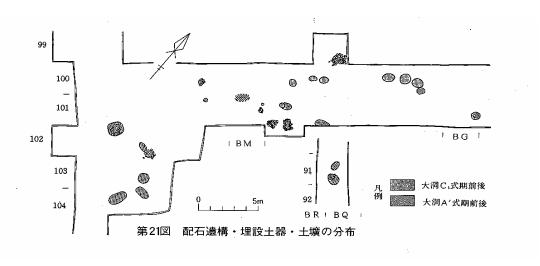
(配石遺構) 確認面から,第 $1 \cdot 2 \cdot 6 \cdot 7$ 配石遺構は大洞A'式期かそれに近い時期,第4 配石遺構は大洞 C_1 式期かそれ以前の時期,第8 配石遺構は大洞A'式期かそれ以前の時期と考えられる。第3 配石遺構は遺構に伴う土器から,大洞A'式期である。

(土壙) 確認面から,第 $1\sim4\cdot6\cdot9\cdot11$ 土壙は大洞 C_1 式期かそれ以前の時期,第 $5\cdot7\cdot8\cdot10$ 土壙は大洞 C_1 式期,第 $13\sim18$ 土壙は大洞A 、式期かそれ以前の時期と考えられる。第 12 土壙は遺構に伴う土器から大洞A 、式期である。

(埋設土器) 確認面から,第 1~3 埋設土器は大洞 C_1 式かそれ以前の時期,第 5 埋設土器は大洞A' 式期かそれに近い時期と考えられる。第 4 埋設土器は大洞 C_1 式期である。

規模・構造などの特徴とまとめると次のようになる。

(配石遺構) 土壙の平面形には楕円形・円形・不整の円形があり、最大規模で径 1.4m,最小規模で径 15 cmである。構造は配石の配置状況から 4 つのタイプに分けられる。すなわち、①土壙堆積土上面内側に配石を伴うもの、②土壙の周縁にのみ配石を伴うもの、③土壙の周縁及び内壁に配石を伴うもの、④土壙堆積土上面の長軸端に接して配石を伴うものがある。③の中には土壙内に土器を伴うものがある。これは逆位の状態で検出され、しかも土壙底面に接して出土していることや堆積土の状況などから土器棺としての可能性が考えられる。また、上部構造として小礫があったと考えられるものがある。土壙内堆積土はいずれも人為的な堆積状況を示す。遺構に伴うと考えられる遺物として、第1配石遺構では土製の小玉1点、第2配石遺構では土器1個体及び臼玉9点、第3配石遺構では土器1個体がある。



(土壙) 平面形には楕円形・円形・不整の円形があり、最大規模で長軸1.7×短軸0.9m、最小規模で径0.5mである。壁は緩やかに立ち上がるものと急に立ち上がるものとが半々ある。深さは最大で60cm、最小で8cmで、底面は平坦なものが多い。土壙内堆積土は人為的堆積状況を示すものが大半である。遺構に伴うと考えられる遺物として、第12土壙では土器2個体及び臼玉15点、土製の小玉2点、第10土壙では有孔石製品2点がある。

(埋設土器) 正位の状態で検出されたものが多く、大形の深鉢形土器を用いている。中には逆位の状態で検出されたものもある。土器内堆積土は2~3 層認められ、骨粉・骨片・木炭・焼土などが含まれている。木炭や焼土が含まれているものは、炉としての性格が考えられる。分布

配石意向は北区の南側及び南区に、土壙は北区の中央部から南端及び南区、西区の東側に、埋設土器は北区の南側に集まる傾向がみられる。したがって、全体の傾向としてはこれらの遺構は、北区の中央部から南区にかけて集中してみられると言える。また、時期的には大洞 C_1 式前後の遺構が北区の中央部から南側にかけて半円形状に配され、大洞A'式前後の遺構は北区の南側から南端に認められたり、南区に半円形状に配される傾向が窺われる。

以上のように遺構の分布にある程度の規則性が認められ、しかも時期毎に分布に違いが認められること、炉としての性格が考えられる埋設土器以外のものは土器棺墓としての性格が考えられること、配石遺構や土壙に伴うと考えられる遺物として土器・臼玉・小玉・有孔石製品などがあり、これらは副葬品と考えられることなどから、配石遺構・土壙・埋設土器の大部分は墓としての性格が考えられる。したがって、北区の中央部から南区にかけて墓域を構成していた可能性が窺われる。また、良好な遺物包含層が北区に、墓域が北区から南区にある程度分布していることから、居住域の存在が予想される。居住域は調査区の北側と推定される。

なお、土器棺墓の類例として梨ノ木塚遺跡(増田町教委:1979)に多くみられ、土壙に副葬品を伴う類例として湯出野遺跡(秋田県教委:1978)、源常平遺跡(青森県教委:1977)にみられる。

3 出土遺物

出土遺物は平箱で約500箱に及ぶため、整理は未だ不十分である。そのため、ここで紹介する遺物は、ほんの一部であることをあらかじめ断っておくことにする。

縄文十器

第VID層出土土器(図版 16~17)

深鉢形土器 (1・2), 浅鉢形土器 (3~6), 壺形土器 (7~9・14・15), 皿形土器 (10・11), 注口土器 (12・13), 台付鉢 (16) などの形態がある。

深鉢形土器 体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部がやや内弯する小形の深鉢形土器である (1・2)。1 は口縁端部に2個1対の突起を有し、その下に1条の刻目帯及び平行沈線が施されている。2 は波状口縁を呈し、口縁部に1条の刻目帯と平行沈線が施されている。

浅鉢形土器 体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部がやや内弯するもの(3・5)、口頚部が「く」の字形を呈するもの(4)、肩部で内弯しながら、口頚部が「く」の字状に外反するもの(6)がある。6は口縁端部に丸味をもつ。3・5は口縁部にのみ文様が認められ、平行沈線や刻目が施されている。4は口縁部から肩部にかけて文様が認められ、口縁部には1条の刻目帯、平行沈線が、肩部には、左傾する羊歯状文が施されている。

壺形土器 体部が球形状にふくらみながら、直立もしくは内傾する頚部に至るもの (7・8・14・15)、徳利形を呈するもの (9) があり、口縁部は外反する。なお7は細長い頚部をもち、口縁部は強く外反する。9 は体部全体に磨り消し縄文による℃字状の文様が二段に分けて施されている。

皿形土器 体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの (10), 体部下端で直立し, 体部下半から口縁部にかけて直線的に外傾するもの (11) がある。11 は丸底を呈している。10・11 ともに器外面全体に文様が施されているが, 11 には体部に磨り消し縄文による大腿骨文が施されている。

注口土器 体部がソロバン玉状をなし、口頚部が「く」の字状を呈するもの(12)、丸底で肩部が内側に緩やかな屈曲をもって頚部に至るもの(13)があり、口縁部は外反する。

台付鉢 体部下端から体部上半にかけて外傾しながら立ち上がり、直立する口縁部に至る器形である(16)。

以上の土器の所属時期は、1~3、5~16 が文様表出技法や器形の特徴、土器の共伴関係から 縄文時代晩期大洞C、式に属すると思われる。4 は大洞BC式に属すると思われる。

第VIC層出土土器(図版 18~20)

深鉢形土器(17・18・31),浅鉢形土器(19・20・25~28),壺形土器(21~23・32~34),注

口土器(24・29), 台付鉢(30) などの形態がある。

深鉢形土器 体部は外傾しながら立ち上がり、肩部から口縁部が「L」字形を呈し、口縁部が外反するもの(17)、口頚部が「く」の字形を呈すもの(18)、口縁部が直立するもの(31)がある。17は肩部に1個の突起を有し、体部に磨り消し縄文による雲形文を施している。

浅鉢形土器 体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部で直立して口縁端部が外反するもの (19・27・28)、口縁部が直立するもの (20・25・26) がある。20・25~28 の口縁端部には山 形状突起が等間隔に施され、突起間には刻目が認められる。19・20・25~28 の体部には磨り消し縄文による雲形文が施されている。

壺形土器 体部は外傾しながら立ち上がり、肩部で内弯しながら直立する口縁部に至るもの (32・33・34)、外反する口縁部に至るもの (21)、内傾する口縁部に至るもの (23) がある。口縁端部はいずれも丸味をもち外反する。また、22・23 などは肩部から体部が球を上下から押しつぶした形を呈している。21 は口縁端部に山形状の突起が 1 個施されている。肩部には磨り消し縄文による雲形文が施されるもの (28)、3 本 1 組の垂線が等間隔に施され、さらに垂線間に雲形文が施されるもの (21)、刻目帯と沈線が交互に施されるもの (22) がある。

注口土器 肩部から体部がソロバン玉形を呈し、口縁部が内傾するもの (24)、球を上下から押しつぶした形を呈し、口縁部が外反するもの (29) がある。29 は台が付いている。29 は口縁端部に山形状突起を1個有し、肩部には3本1組の垂線が等間隔に施され、さらに垂線間に雲形文が施されている。24 は肩部に鉢巻状の雲形文が施されている。

台付鉢 体部下端から体部上半にかけて外傾しながら立ち上がり、口縁部で直立あるいはや や内傾し、口縁端部が外反するものである(30)。口縁端部には 1 個の山形状突起を挾んで 2 個 1 対の突起が等間隔に施されている(30)。

以上の土器の所属時期は、文様表出技法、器形などの特徴、土器の共伴関係から、縄文時代 晩期大洞C。式に属すると思われる。

第VIB層出土土器(図版 21-35~37)

壺形土器(35), 台付鉢(36·37) などの形態がある。

壺形土器 体部下端で丸味をもちながら、体部上半まで直立し、肩部が内傾するもの(35)で、きんちゃく形を呈している。肩部にはヒトデ状に隆帯が施され、さらに隆帯間には10~10数本の平行沈線が施されている。なお、隆帯の先端は「Y」字状を呈す。

台付鉢 体部は緩やかに内弯しながら立ち上がり、口縁部が直立するもの (36)、体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部で直立して口縁端部が外反するもの (37) がある。36 は口縁部に工字状文が施されている。37 は口縁端部に 2 種類の突起が交互に、しかも等間隔に施され、肩部にはπ字状文が施されている。

以上の土器の所属時期は、36 が縄文時代晩期大洞A式、35・37 が大洞A'式であると思われる。

以上,遺物包含層出土土器について,述べてきたが,第VIB層は,出土土器からさらに大別しなおす必要があると思われるが,調査段階では確認できなかったので今後の整理に待ちたい。 石製品・十製品(図版 21・22・口絵カラー3・4・6)

第VIA層~第VID層から各種の石製品・土製品が出土している。本来ならば各層ごとに取り扱うべきであるが、ここでは整理不十分なため一括して扱い、紹介のみにとどめる。

石器には、石鏃 (38~45)、石匙(46~52)、石錐(53)、磨製石斧 (54·55)、円盤状石製品 (56・58)、石皿、凹石、磨石、独鈷石 (37) などの他に、岩版 (59·61)、岩偶 (60)、勾玉 (カラー口絵 6)、有孔石製品 (62~64)、ペンダント状石製品 (65)、小玉・臼玉 (カラー口絵 6)、石刀・石剣・石棒などの呪術的・装飾的なものがある。

土製品には、土偶(カラーロ絵 3)、土版 (66) などの呪術的なものの他に、滑車形耳飾り (67)、 耳栓形耳飾り・小玉(カラーロ絵 4)などの装飾的なもの、スタンプ状土製品、円盤状土製品 などの用途不明なものがある。

骨角器

棒状の刺突具が出土している。

漆器 (カラー口絵1・2・5・7)

第VIB層及び第VIC層から、藍胎漆器6点、櫛3点、形態不明な漆器1点が出土している。 ここでは比較的保存状況が良好なものについて紹介することにする。

第VIC層出土漆器

櫛(カラーロ絵 5)欠損しているため全体の形状は不明であるが、頭部はその中央部から両脇に緩やかに反り上がり、両端では山形状を呈すと思われる。また、頭部の上方に2個の突起が形成されていると思われる。歯は痕跡から見ると、断面形は円形を呈し、径4mmを計り、1.5~2 mm間隔で並んでいる。頭部の外面には赤漆が塗られている。横幅の現存長約5.5 cm高さ1.5 cm, 幅8 mmを計る。

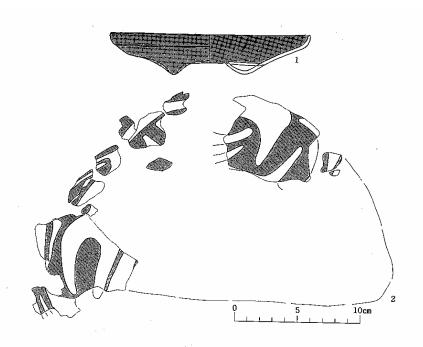
形態不明な漆器(カラーロ絵 7)半欠損している。残存部は円形を呈し径約 2.6 cm器厚 5~6 mmを計る。横断面形は端部に丸味をもち、上面では中央に向かって緩やかに傾斜し、下面では平坦である。中央脇に楕円形の貫通孔が認められる。外面には赤漆が塗られている。

第VIB層出十漆器

藍胎漆器 1 (カラー口絵 1・第22 図 1)4 つの脚をもつものである。体部下端から体部上半にかけ外傾しながら立ち上がり、口縁部が肥厚し、直立する浅鉢形である。内外面とも赤漆が塗られている。口径 16 cm、器高 3.7 cm、器厚 3 mmを計る。

藍胎漆器 2 (カラー口絵 2, 第 22 図 2) つぶれた状態で出土したため、全体の器形は不明である。内外面とも、黒漆を塗った後に赤漆で曲線状の文様を描いている。器厚は約 1 mmを計る。

以上漆器について説明してきた。これらの所属時期は、出土土器との共伴関係から、櫛・形態不明な漆器は、縄文時代晩期大洞 C_2 式、藍胎漆器 $1\cdot 2$ は、大洞A式に属すと思われる。なお、藍胎漆器、櫛は山王遺跡(伊東・芹沢・伊藤・林・工藤:1965)、亀ヶ岡遺跡(三田史学会:1959)、是川遺跡(喜田・杉山:1932)に類例があり、また、藍胎漆器で内外面ともに文様を描いているもの(大洞A式)は、山王遺跡出土例に類似する。



第22図 藍胎漆器

IV まとめ

- 1. 根岸遺跡は、江合川によって形成された河岸段丘上(竹原面)に立地している。
- 2. 調査の結果,縄文時代晩期の遺物包含層及び配石遺構8基,土壙18基,埋設土器5基,石囲炉3基,フラスコ状ピット2基,焼面1箇所,ピット群3箇所が確認された。
- 3. 遺物包含層は、縄文時代晩期大洞 C_1 、大洞 C_2 、大洞 $A\cdot A$ 、式期の 3~4 期に形成されたと考えられる。
- 4. 配石遺構、土壙、埋設土器の多くは、遺構の分布・規模・構造・出土遺物などに共通性がみられることから、墓としての性格が考えられる。所属時期は、大洞 C_1 式期前後、大洞A'式期前後の2期に大別でき、時期毎に分布が異なる。すなわち、前者は北区の中央部から南側に集中し、後者は北区の南側、南区に集中して分布する。このことから、北区の中央部から南区にかけて墓域を構成した可能性がある。

なお、配石遺構は、県内で初めて確認されたもので、注目される。

- 5. 遺物包含層が北区に、墓域が北区から南区に及んでいることから、居住域の存在が予想される。居住域は、調査区の北側と推定される。
- 6. 出土遺物には、縄文土器・石製品・土製品・骨角器・漆器などがある。 縄文土器は、大半が晩期に属するもので、完形土器、一括土器が多い。その他に、後期末に 属するものがある。
- 7. 漆器には、藍胎漆器・櫛・形態不明な漆器などがある。漆器の出土例は県内では、石巻 市沼津貝塚、一迫町山王遺跡に次ぐものである。この時期における出土例が少ないだけに漆器 を研究する上で貴重な資料と言える。

〈引用・参考文献〉

青森県教育委員会 1977:「源常平遺跡発掘調査報告書」

秋田県教育委員会1978:「湯出野遺跡発掘調査概報」

伊東信雄・芹沢長介 1965:「宮城県―迫町山王遺跡」日本考古学協会発表要旨

伊東玄三・林 謙作

工藤雅樹

伊東信雄 1965: 「宮城県―迫町山王遺跡」 日本考古学年報 18 日本考古学協会

小元久仁夫 1966: 「宮城県鳴子盆地の地形発達史」地理学評論第39 巻第8 号 日本地理学会

喜田貞吉・杉山寿栄男1932:「日本石器時代植物性遺物図録」刀江書院

佐藤信行・藤原二郎 1980:「宮城県岩出山町片岸遺跡出土の弥生式遺物について」 籾第2号

弥生時代研究会

石器文化談話会1978:「座散乱木遺跡発掘調査報告書I」石器文化談話会誌第1集

千葉宗久 1980: 「玉造遺跡」宮城県文化財調香報告書第 68 集

増田町教育委員会1979:「梨ノ木塚遺跡発掘調査概報」

三田史学会 1959:「亀ヶ岡遺跡―青森県亀ヶ岡低湿地遺跡の研究―」考古学民族学叢刊第3冊

宮城県教育委員会1979:「遺跡地名表」宮城県文化財調査報告書第46集(修正版)

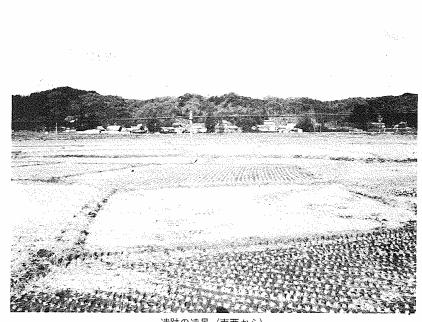
宮城県教育委員会1979:「遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第47集

澁谷正三1980:「根岸遺跡」宮城県文化財調査報告書第64集

写 真 図 版



図版1 根岸遺跡の位置及び周辺の地形



遺跡の遠景 (南西から)



遺跡の遠景(西から)

図版 2



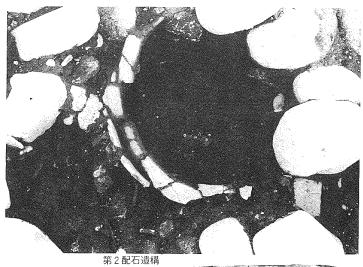
第1·2配石遗構



第1配石遺構



第1·2配石遺構





第1・2配石遺構臼玉・小玉





第3配石遺構 図版4



第1配石遺構 北東部



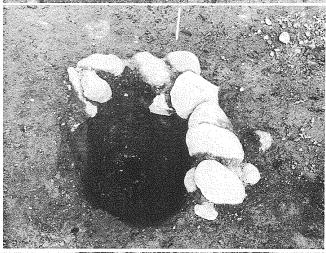
同 上 南東部



第2配石遺構 精査終了



第4配石遺構

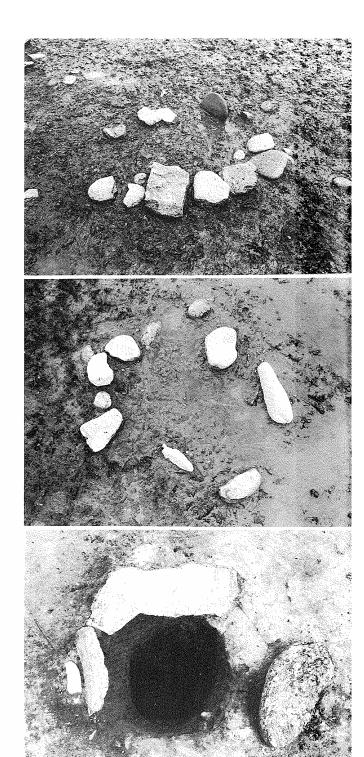


第5配石遺構



第6・7配石遺構

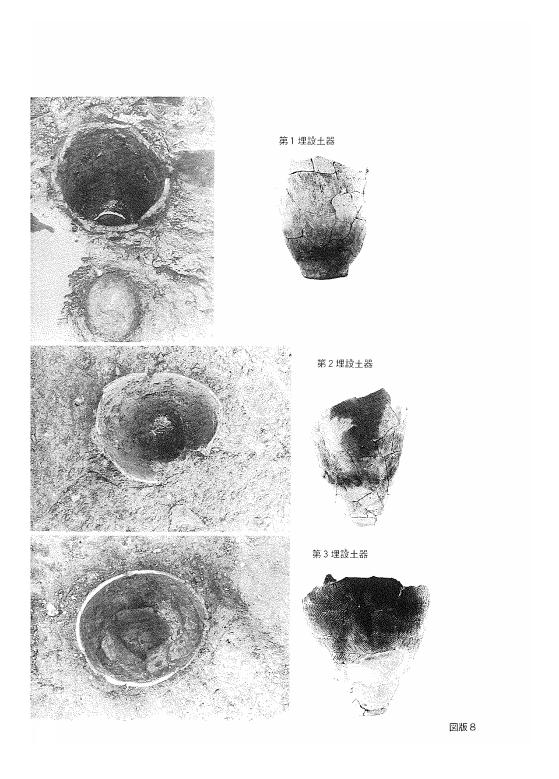
図版 6



第6配石遗構

第7配石遺構

第8配石遗構







第17土壙及び出土遺物(石皿)



第10土壙出土有孔石製品



第1石囲炉

第1フラスコ状 ピット

図版10

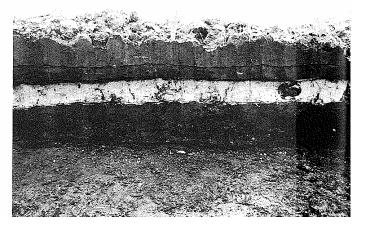


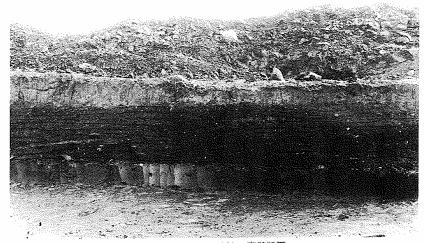
北区土壙・ピット群



西区ピット群



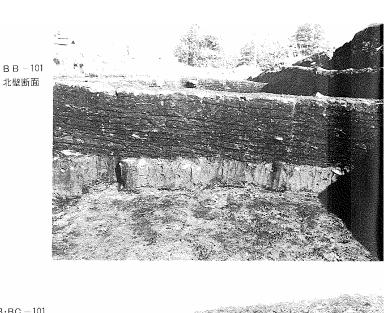


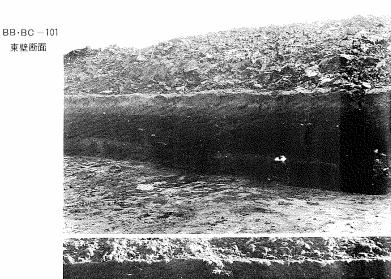


BA・AT-101 東壁断面

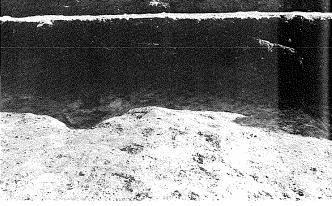


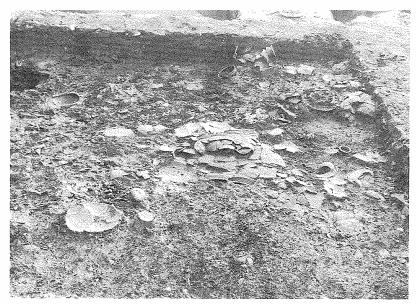
A T - 101 北・東壁断面 図版12





BF-100 東壁断面



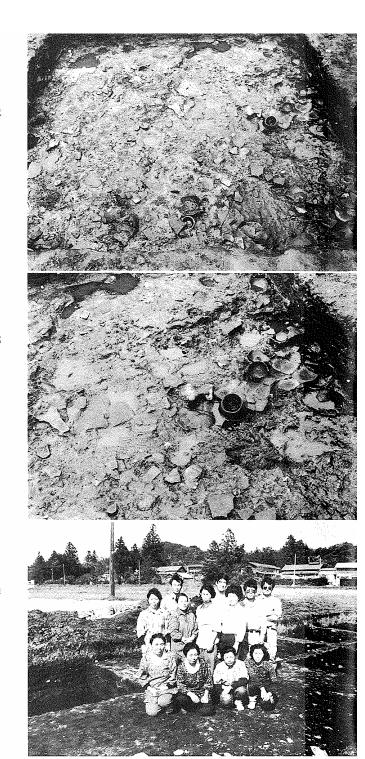


BE-101 土器出土状況



BE-101 土器出土状況(細部)

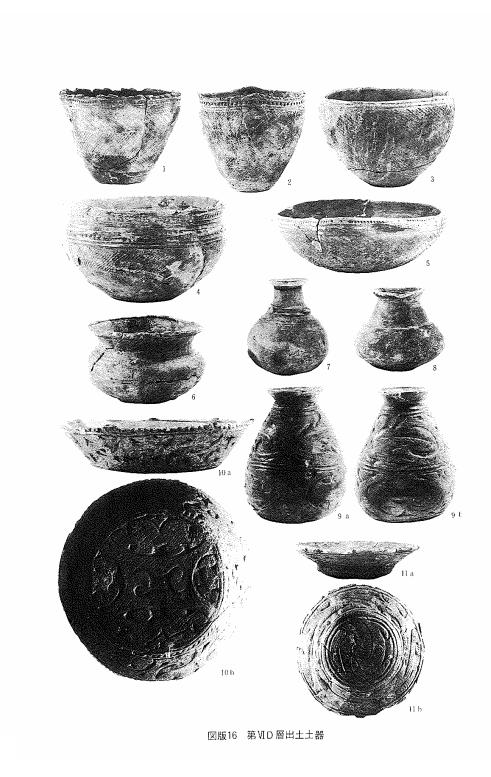
図版14

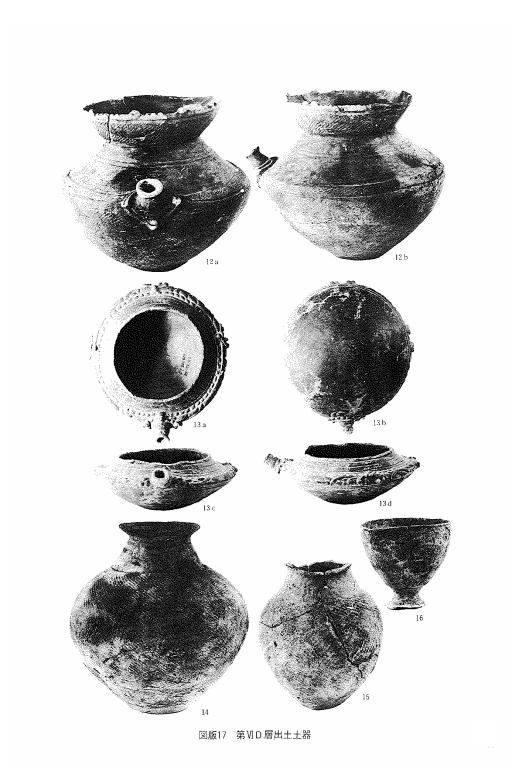


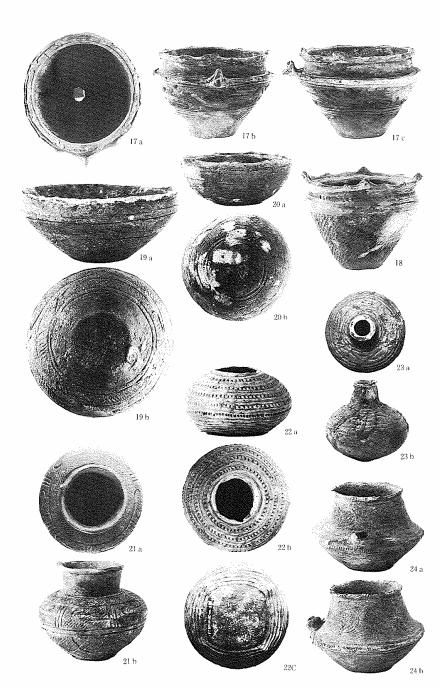
B H - 101 土器出土状况

同上細部

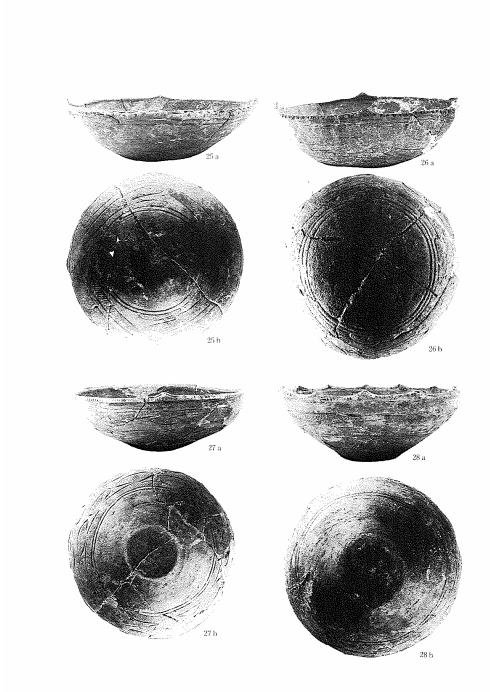
発掘調査員・作業員



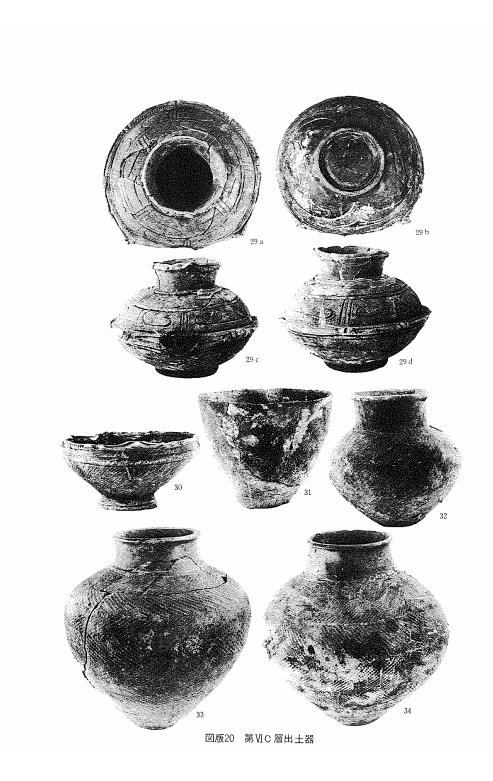


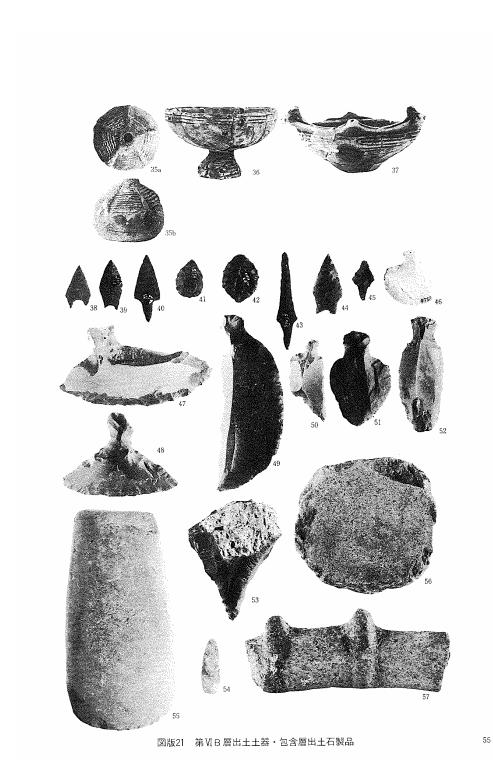


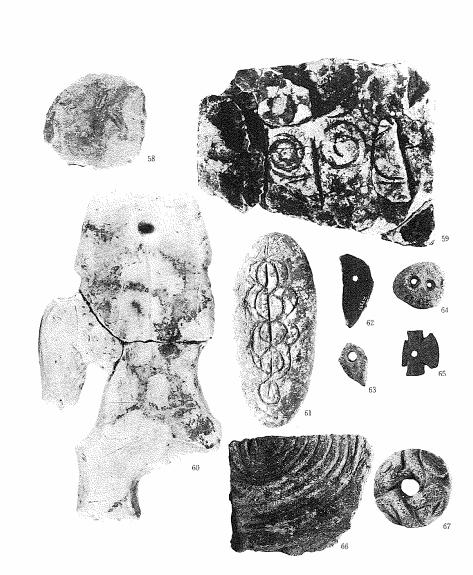
図版18 第ⅥC層出土土器



図版19 第Ⅵ○層出土土器







図版22 包含層出土石製品・土製品

Ⅱ 色 麻 古墳群

調査要項

遺跡所在地:宮城県加美郡色麻町四釜

調査主体者: 宮城県教育委員会

調查担当者: 宮城県教育委員会文化財保護課

調査員:阿部 恵 太田昭夫

調 査 期 間:昭和55年5月12~17日

調査対象面積:約2100 ㎡ 発 掘 面 積:約126 ㎡

登録番号:宮城県遺跡地名表登録番号

調查協力機関:宮城県農政部古川土地改良事務所

色麻町教育委員会 · 色麻土地改良区

I 位置と環境

今回確認調査の対象となった色麻古墳群上郷支群No.7 は加美郡色麻町四釜字地蔵堂 2 番地に田中後遺跡は四釜字田中後に所在する。両遺跡とも色麻町の中心地で、県道岩出山、吉岡線に沿って南北に細長くのびている四釜の町並の西方約 500mに位置しており、現状は水田となっている。

色麻町の地形を概観すると、町西部には奥羽脊梁山脈を構成する船形火山地と、それから派生する大・小起伏丘陵地の加美丘陵が位置し、次第に低平になりながら北東方向に櫛歯状にのびている。この丘陵地帯を開柝して東流する鳴瀬川とその支流である大小の河川は、その流域に小野田低地と呼ばれる上・中・下位面の段丘(砂礫台地)を形成しており、さらにそれに接して大崎低地へと連なる扇状地性低地が発達している。四釜地区は鳴瀬川の支流、花川流域に形成された花川(王城寺)扇状地の東端の部分にあたっている。遺跡周辺の標高は約35mである。

色麻町内にはこの花川扇状地をはじめとして扇状地,段丘,丘陵上などに旧石器時代以降の多くの遺跡の存在が知られており,現在まで91ヶ所の遺跡が確認されている(宮城県教委:1981)。このうち四釜地区周辺の花川扇状地に立地する遺跡を時代別にみてみる。

旧石器時代の遺跡には要害遺跡がある。石刃が2点出土している。

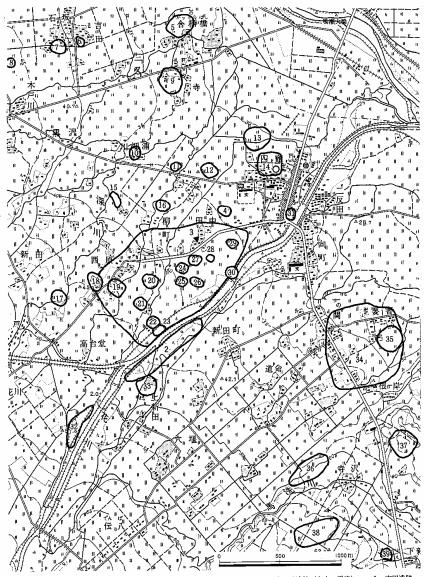
縄文時代の遺跡には西昌寺遺跡や新宿A・B遺跡などがあるが、いずれも少量の土器、石器が出土しているだけである。

弥生時代の遺跡には要害遺跡、西原A遺跡、大坊遺跡などがあり、遺跡数はわずかではあるが増加する。

古墳時代の遺跡には御山古墳や色麻古墳群、蝦夷塚古墳群などの高塚古墳がある。御山古墳は円筒埴輪を伴う直径50m前後の大型円墳であり、色麻古墳群はかつて250基以上が確認された群集墳である。このような多くの古墳の存在は周辺に同時期の集落の多数存在した可能性を示唆するが、今のところ詳細は明らかではない。

奈良・平安時代になると花川扇状地のいたるところに多くの遺跡が立地するようになる。その大部分は集落跡と考えられ、発掘調査の行われた一の関遺跡(宮城県教委:1977)では奈良時代の,上新田遺跡では平安時代の住居跡が多数発見されている(小井川:1975)。また,一の関遺跡からは、建物基壇跡や掘立柱建物跡も発見され,この遺跡は古代の寺院あるいは城柵(色麻柵),官衙(色麻郡衙、色麻駅舎)の性格をも合せもつとされており、古代の色麻郡の中心が花川扇状地にあったことが知られる。

中世の遺跡には下黒沢内館跡、四釜城跡などの城館跡がある。



第1図 周辺の遺跡

Ⅱ 調査の概要

(1) 色麻古墳群上郷支群 No.7

a 調査の方法と経過

No.7 は、昭和53年4月の分布調査の時点には、すでに開田によって墳丘が失われていた古墳である。しかし、その削平が比較的最近であったため、聞き取りによって位置を確認し、No.7 の番号を付した。この古墳は昭和25年に東北大学考古学教室が実施した分布調査で、No.43の番号を付された古墳と位置的に符合することから、同一のものと思われ、この時に東西8.8m、南北9.7m、高さ2.1mの現模であったと記録されている(宮城県教委:1979)。

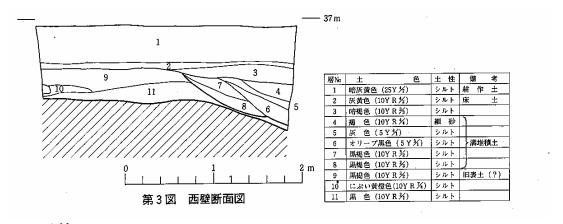
今回は墳丘の削平されたNo.7 に、周溝などの遺構が残存しているかどうかを確認することを目的に、調査を実施した。5月12日、古墳の位置していたとされる水田に 3×15 mの東西に細長いトレンチを設定した。調査の結果、表土下約50cmで溝が1本検出されたが、古墳に伴うと思われる遺構は検出されなかったため、No.7の調査はこのトレンチ1本で終了することとした。5月13日に断面実測、写真撮影などをし、5月14日に埋め戻しを行った。



b 発見された遺構と遺物

溝一旧表土と考えられる黒褐色土層上面で確認された。確認面で約3mの幅をもちトレンチに対してやや斜行しながら東西方向に直線的にのびている。深さは、1m以上あると思われるが、溝の堆積土から近世の陶磁器破片が底面近くまで少量づつ出土するため、この溝の掘り上げは一部に留めた。

出土遺物ー溝の堆積土から出土した陶・磁器以外に,第1層から須恵器甕の破片が2点出土 している。



c 小結

発掘調査によって検出された溝は直線的にのびる大溝で、堆積中から陶・磁器片が出土することから、古墳に伴う溝ではないことが知られた。また、調査中に水田の所有者に聞いた話では、「古墳を削平するときには注意して崩したが石は1個しかなく、あとはすべて土であった。」とのことで、調査結果とも合せて考えると、No.7 は古墳ではなかった可能性が強い。

(2) 田中後遺跡

a 調査の方法と経過

田中後遺跡は昭和53年の分布調査のさい、土師器、須恵器が水田や畑などに散布していた遺跡で、その面積は約20,000㎡と考えられた(宮城県教委:1979)。

今回の調査は遺跡の性格やその範囲を知ることを目的に、5月 14 日に開始した。まず、遺物の散布する畑、水田に $20\sim40$ mの間隔を置いて、南北に長い 4 本のトレンチを任意に設定し、南からA~Dトレンチと命名した。各トレンチの規模は、A、B、Dトレンチが 3×6 m、Cトレンチが 3×9 mである。調査によって、B、C、Dトレンチから溝が検出され、各トレンチからは土師器、須恵器などの遺物が出土した。調査の終了したのは 5月 17 日である。

b 調査の成果

1. 遺構と遺物

た。

各トレンチごとに調査の成果について述べる。

Aトレンチー最も南側の畑に設定したトレンチである。表土下約40cmで地山面に達するが、 遺構は検出されなかった。出土遺物には土師器が少量ある。

BトレンチーAトレンチの北東 40mの水田に設定したトレンチである。表土下約 30 cmで地山面に達する。トレンチ北半の地山面で東西方向にのびる幅 30 cm, 深さ 15cm の溝が検出されたが、この溝は表土から掘り込まれたものである。出土遺物には土師器破片が 1 点ある。

CトレンチーBトレンチの北東 35mの水田に設定したトレンチである。堆積層には次の 2 層が認められる。

第1層-暗褐色($10YR^3/_2$)シルトー $20\sim25$ cmの厚さをもつ、表土層である。

第2層—黒褐色 $(10 \, {
m Y \, R}^3/_3)$ シルトー約 $10 \, {
m cm}$ の厚さをもち,その下は地山面となっている。 遺構としては第2層を掘り込んだ幅 $2.0 \, {
m m}$,深さ $40 \, {
m cm}$ の南北方向にのびる溝が $1 \, {
m a}$ 検出され

第4図 地形と調査区

出土遺物には第1層・第2層から出土した多くの土師器・須恵器がある。

DトレンチーCトレンチ北東20mの水田に設定したトレンチである。Cトレンチの第2層はこのトレンチでは認められず、地表下約30cmで地山面となっている。遺構としては、Cトレンチで検出された溝と規模や方向のほぼ均しい溝が1本が検出された。出土遺物には第1層から出土した少量の土師器・須恵器がある。

2. 出土遺物と年代

出土遺物には第1表に示したように、Cトレンチを中心として出土した土師器(坏,高台付坏・甕)、須恵器(坏・高台付坏・蓋・甕・帯)があるが、図示できるような資料はない。

第1表でも明らかなように本遺跡出土土師器、須恵器は製作にロクロを使用するものが多く、 土師器坏で、底部切離し技法の明らかなものは、すべて回転糸切り技法で切離されている。また、須恵器坏では、回転へラ切り後手持ちヘラケズリの再調整が加えられるものとがあり、高 台付坏には底部切離し後回転へラケズリの再調整を加えるものがある。

以上のような特徴から本遺跡出土の土師器は、土師器編年の表杉ノ入式に位置づけられると 思われる。また、須恵器は、特に坏については底部切離しに2通りの技法がみられるが、これ らは県内では表杉ノ入式の土師器と共伴している例が報告されている。したがって、須恵器も その多くは表杉ノ入式期に相当するものと考えられる。

c 遺跡の性格

田中後遺跡出土土器群は、前項で検討したように、表杉ノ入式期のものと考えられた。この時期の遺構は、今回の調査では検出することはできなかったが、土器が集中して出土したCトレンチ第2層は表杉ノ入式期の遺物包含層である可能性が強い。第4図に田中後遺跡周辺の微地形を示してあるが、Cトレンチは北東方向に舌状に伸びる張り出し先端部分にあたることが知られる。このことから、田中後遺跡は住居跡などの遺構は検出されなかったものの、Cトレンチの南側の張り出し基部を中心に形成された、表杉ノ入式期の集落跡である可能性が強く、その面積は約10000㎡におよぶものと考えられる。

Ⅲ まとめ

- 1. 色麻古墳群上郷支群と田中後遺跡は、花川流域に形成された花川(王城寺)扇状地上に立地している。
- 2. 色麻古墳群上郷支群No.7 では、今回の調査で古墳に伴うと思われる遺構は確認できなかった。このNo.7 は古墳でなかった可能性も強い。
- 3. 田中後遺跡では、今回の調査で住居跡などの遺構は検出されなかったが、包含層の存在などから表杉ノ入式期の集落跡と考えられた。

〈引用・参考文献〉

阿部博志・千葉宗久(1980):「台ノ山遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書 II 』宮城県文化 財調査報告書第62集

小井川和夫(1975):「上新田遺跡」日本考古学年報 26

氏家和典(1957):「東北・土師器の型式分類とその編年」歴史14輯

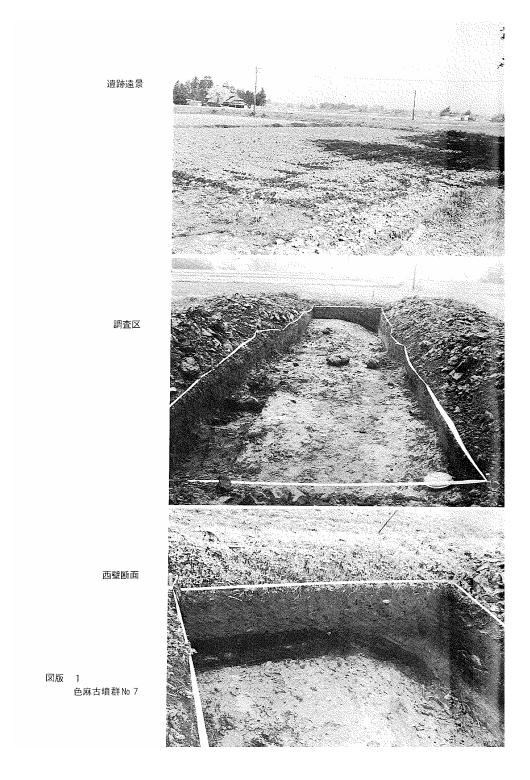
宮城県教委(1977): 「一の関遺跡」 『宮城県文化財発掘調査略報(昭和 51 年度分)』 宮城県

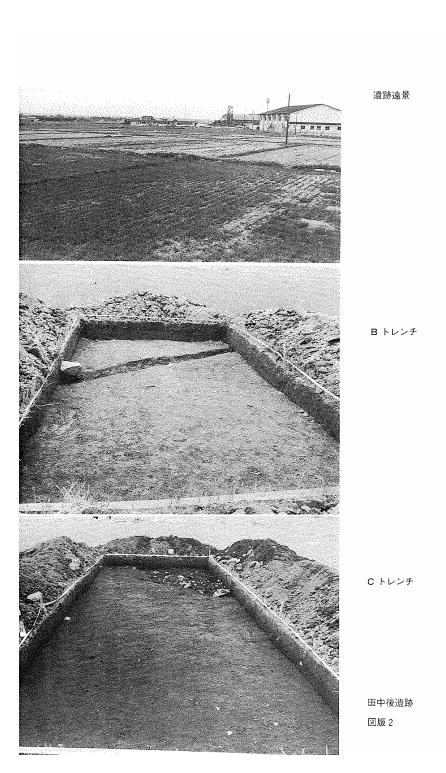
文化財調査報告書第48集

宮城県教委(1979):「色麻古墳群」『遺跡詳細分布調査報告書(昭和 53 年度)』宮城県文化

財調査報告書第58集

| 種 | 器 | | 器 | 面調 | 整 | | 田 | 中 | | 後 | 遺 | 8 | 亦 | , | Γ" |
|-----|--|--------|----------|---------------------------|---------------|----------|-----|-----|-----|-----|--------|-----|-----|--------------|-----|
| 138 | 1 200 | l | | | | Ą | В | Ç | Ç | Ç | Ç | Ç | D | 7 | |
| | | 部位 | 外 | 面一内 | 蓶 | 1-2 | : 1 | 1 | 2 | 1 | 1 2 | 3 | 1-2 | 号 | 81 |
| 别 | 形 | | `` | | | 1 | . 1 | 1 | - 1 | j. | - 1 | - 1 | 1 | 墳 | |
| | | | - | | (m. 4-) | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 2 | ż | 1 | <u> </u> | |
| 土 | 坏 | 口線部 | D 7 | ローミガキ | | <u> </u> | | 1 | _1_ | 1 | | 1 | | ļ | 4 |
| | | 体 部 | ロク | ローミガキ Jリーミガキ | | | | | | 3_ | _ | | | | 3 |
| | | 底部 | 不 | リーミガキ 明ーミガキ | | 11 | | 2 | | 1 | 2 | | | ╁ | 6 |
| | 高付台塚 | 底 部 | 不 | 明一ミガキ | | | 1 | | | | | | | \vdash | 2 |
| | EDIT | 口縁部 | D 7 | ローロ ク | ū | | | 1 | 1 | | 4 | 1 | | - | 7 |
| | | H #SEP | ナ | デーナ | ₹" | | | 1 | | | | | - | | 1 |
| | | | U 2 | ローロック | E . | | | | 2 | | 2 | 5 | | | 9 |
| | | | ロク | 口一刷 毛 | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| 師 | | 体部 | D 7 | ローミガキ | | | | | | | | 1 | | \vdash | 1 |
| | | | 0 2 | ローナ | ザー明 | | | 1 | | 2 | | | | _ | 3 |
| | | 14P ED | ケズ | リーナ | <u>明</u> デ | 1 | | 2 | | 9 | 13 | 14 | 2 | <u> </u> | 41 |
| | İ | | ケズ | リーローク | <u></u> | | | | 2 | - 3 | 1 | 14 | | | 3 |
| === | | | ケズ | リー刷 毛 | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| 詞 | | | ケズ | リー不 | 明 | | | 1 | 2 | 1 | | | | | 4 |
| | | | 刷毛 | 目ーナ | デ | | | | | | | 1 | | | 1 |
| | | | タタ | キーナ | デ | | | | | | | 1 | | | 1 |
| | | | 不 | 明一不 | 明 | | | 5 | | 3 | 7 | 3 | | | 18 |
| | | 底 部 | 不 | 明-不 | 明 | | | 2 | 1 | | | | | \sqcup | 3 |
| | 坏 | 口縁部 | ロク | ローロ ク | ㅁ | | | | 1 | 3 | 4 | 3 | | ļ | 11 |
| | | 体 部 | ログ | D-D 7 | - | | | 4 | 1 | _2 | 4 | | | | 11 |
| | | 底 部 | | 切り一口 ク・ラ切り後手 | | | | | 2 | 2 | | 1 | - | | 5 |
| | | | ヘラケズ | | 1D | | | | | | 2 | | | | 2 |
| | | | 回転系切 | リカーロ ク | 디 | | | 1 | | | 1 | | | | 2 |
| | 高付 | 底部 | | ケズリーロ | | | | | | | 1 | 2 | | | 3 |
| ı | 台坏 | | | 明一ロ ク | U | | | | | | | .1 | | \Box | 1 |
| | 蓋 | 端部 | ロク | ローロ ク | - | | | | 1 | | | | | | 1 |
| - | | 体部 | ケズロク | リーロ ク | U | | | | 1 | | | | | - | 1 |
| | | □★秋□□ | | ローロ ク | D D | | _ | 5 | 1_ | 2 | 1 | 1 | | \dashv | 7 |
| | | | | ロー不 | 明 | | | | | | 1 | | - | \dashv | 5 |
| | | 体 部 | | キーロク | ש | | | ī | . 4 | 3 | 1 | | - | | 8 |
| | | | <u> </u> | キータ タ | + | | | | | 1 | 1 | 1 | | 2 | 5 |
| İ | | | 9 9 | キーナ | デ | | | | | | | 6 | 1 | - | 7 |
| | | | ケズ | リーナ | デ | | | | | | 3 | | 1 | | 4 |
| | | | | リーロ ク | U | | | 2 | 5 | | | | | | 7 |
| 1 | | 底 部 | ケズ | リーナ | デ | | | | | | - | 1 | | | 1 |
| | | | .不 | 明一不 | 明 | | | 2 | 1 | | | | | | 3 |
| | 壺 | 高 台 | | ローロ ク | | ·2 | | _ 1 | | | | | | | 1 |
| | 計 | | | | | | 1 | 37 | 26 | 33 | 47 | 45 | 4 | 2 | 197 |





Ⅲ 千 賀 田 遺跡

三代河原遗跡

調査要項

千賀田遺跡 三代河原遺跡

遺跡所在地:宮城県伊具郡丸森町大字千賀田 : 同町大内字三代河原

調査主体者:宮城県教育委員会 : 同左 **調査担当者**:宮城県教育委員会文化財保護課 : 同左

調査員:平沢英二郎・新庄屋元晴

土岐山武

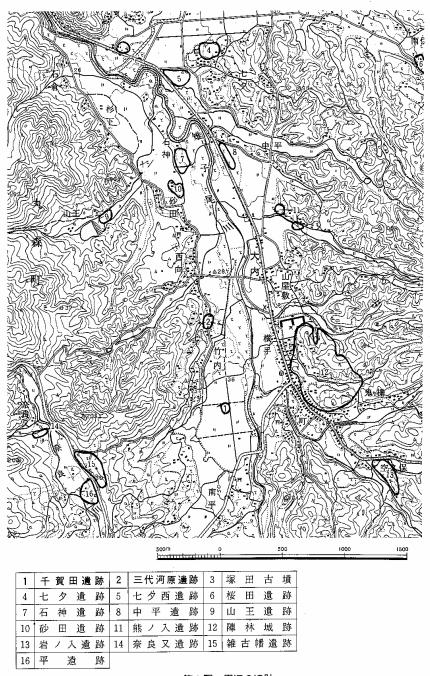
調査期間:昭和55年10月4日~8日 :昭和55年10月10日~17日

 調査対象面積:約 16000 ㎡
 :約 20000 ㎡

 発掘面積:約 783 ㎡
 : 684 ㎡

遺 跡 記 号 : G I (宮城県遺跡地名表登録番号 10086) : G J (同番号 10070)

調査協力機関:丸森町教育委員会: : 同左



第1図 周辺の遺跡

68

I 遺跡の立地

千賀田遺跡は伊具郡丸森町大内字千賀田に所在し、丸森町の中心部から国道 113 号を南方に 約 12 km進んだ地点に位置している。三代河原遺跡は同町大内三代河原に所在し、千賀田遺跡 から 0.7~0.8 km北側に位置している。

県の最南端に位置する伊具郡丸森は東,南,北西三方をそれぞれ亘理地塁山地,阿武隈山地, 角田丘陵性山地によって囲まれている。北部のみがわずかに開けて沖積低地となっておりこの 低地内を阿武隈川が大きく蛇行しながら流れている。

阿武隈山地からは多くの小丘陵が派生し、そのいくつかは先端が丸森町南部まで延びているが、これら小丘陵間には新川、内川、雉子尾川などの小河川が北流しており、北部で阿武隈川にそそぎこんでいる。

千賀田遺跡はそれら河川の一つで丸森町の東部を流れる雉子尾川西岸の自然堤防上に立地 している。遺跡付近は南から北にかけてゆるやかに傾斜している。標高は34~36mで、遺跡の 現状は水田である。

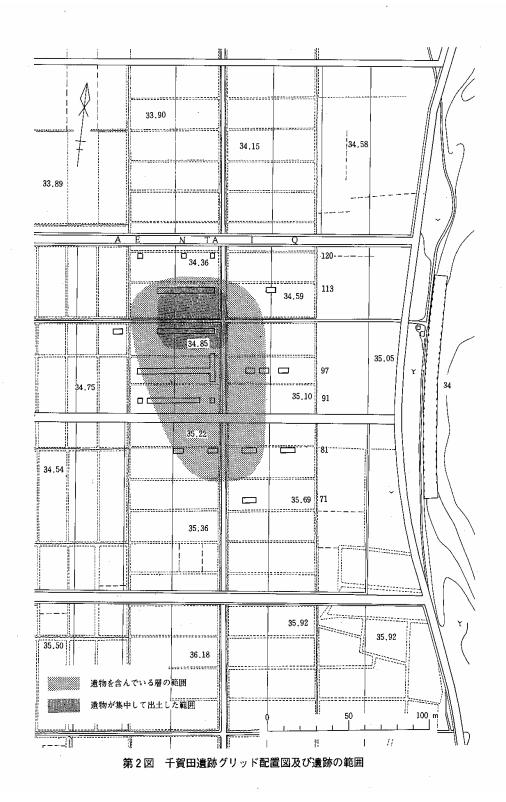
三代河原遺跡も雉子尾川西岸の自然堤防部と、雉子尾川に東面する小丘陵端部斜面とにかけて立地し、標高は30~32mで、西から東にかけてゆるやかに傾斜している。遺跡の現状は自然堤防部が水田、小丘陵端部は野菜畑および桑畑となっている。

なお、両遺跡の周辺には縄文時代の遺跡としては七夕遺跡が奈良、平安時代の遺跡としては 七夕西遺跡、中平遺跡、石神遺跡などがある。

Ⅱ 調査の概要

両遺跡とも昭和 33 年用水路工事の際、遺物が出土し遺跡として登録されていた遺跡であるが、現状が水田であり、しかも限られた場所からだけの出土であったため、両遺跡とも正確な範囲を確認するまでには至っておらず、今回の調査の運びとなった。

調査の目的は遺跡の範囲,遺構の有無,遺構確認面までの深さ,及びその性格を把握することにある。調査は昭和 55 年 11 月 4 日から開始した。まず,対象地区全体に 3×3 mを 1 とするグリットを設定し,その後それをもとに任意の調査区を設定して調査を行なうことにした。なお,基準線は千賀田遺跡は現水田区画($N-7^{\circ}-W$)に,三代河原遺跡は磁北にあわせた。グリット名は 3m単位に東西方向をアルファベット,南北方向をアラビア数字で示した。



〈千賀田遺跡〉

千賀田遺跡ではかつて遺物が出土した地点を中心に、数グリットを連結してトレンチを設定し調査を行なった。その結果、約 20 cmの厚さの水田耕作土下に褐色土層が認められた。西側にのみ分布し、最も厚いE区で約 50 cmであるが、遺物は全く含んでいなかった。褐色土層下は黒褐色土層となる。この層は厚さが $20\sim30$ cmあり、遺物を含んでいる。そこで、この層の広がりを確認するためその周辺に更にトレンチを設定した。その結果この層は南側から東、西、北三方向に傾斜しており、特に西側では急激に落ち込み沢状になっており、北、東、南側でも漸次、層は薄くなりなくなってしまうことが確認された。遺物は $K\sim T-102\sim103$ 区から多数出土したが、他の区ではそれほど多くはなかった。なお、この層下は暗褐色土層(厚さ $20\sim30$ cm)、黒色土層となる。黒色土層中には $40\sim50$ cm大の河原石が多くみられた。ともに遺物は含んでいない。

なお、基本的な層位をまとめると次の様になる。

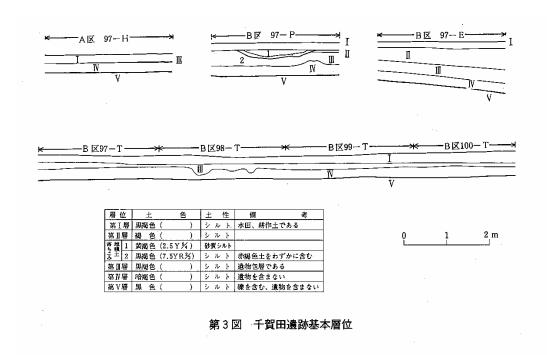
第 I 層:黒褐色土層(厚さ約20cm)

第Ⅱ層: 褐色土層 (厚さ 0~50 cm)

第Ⅲ層:黒褐色土層(厚さ0~36cm)遺物を含んでいる。

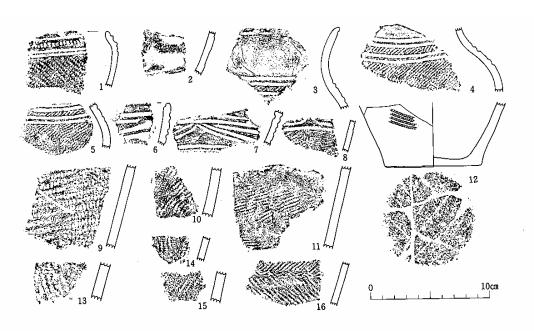
第IV層:暗褐色十層(厚さ20~30 cm)

第V層: 黒色土層

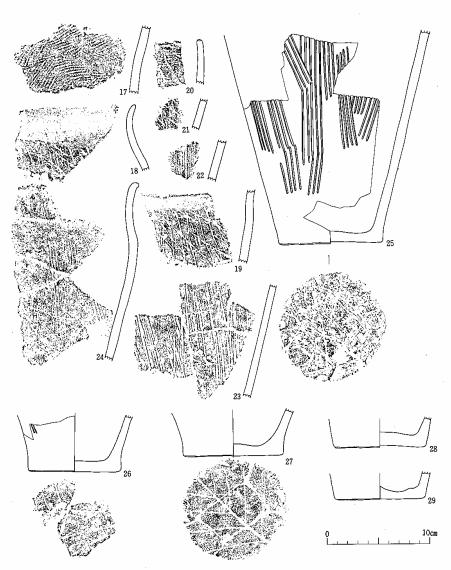


(出土遺物)

基本層位第Ⅲ層中から縄文土器が出土している。そのほとんどが粗製土器で、精製土器は数 点だけである。しかも、その大部分が小破片のため、全体の器形については不明な点が多い。 1 は深鉢形土器の口縁部破片である。体部上半から口縁部にかけて外傾し、口縁部が内傾する。 口縁部に数条の平行沈線からなる文様帯があり、沈線間に刺突が施されている。地文RLの単 節斜行縄文が施されている。2 は皿形土器と思われる。磨消縄文技法によって※字状の雲形文 が描かれている。縄文原体については摩滅が激しく不明である。いずれも時期は大洞℃式と思 われる。3, 4, 5 は壺形土器の口縁部と体部破片である。3 は口縁部外反, 4, 5 は体部上半か ら頸部にかけて内弯する。いずれも頸部に数条の平行沈線によって区画された縄文帯がみられ る。すべて地文LRの単節斜行縄文である。いずれも時期は大洞C2式と思われる。6,7,8は 浅鉢形土器の口縁部と体部破片である。6は口縁部外傾、7、8は体部上半から口縁部にかけて 外傾する。 いずれも工字状の文様が施文されている。 8 は地文LRの単筋斜行縄文が施文され ている。いずれも時期は大洞A'式と思われる。9~29 は深鉢形土器の口縁部,体部,底部破 片である。18,20,24 は口縁部破片であるが、18,24 は口縁部外反、20 は口縁部内弯する。9 ~15は単節斜行縄文だけが施文されている土器で、原体は11がRLで他はすべてLRである。 16 は結節のある羽状縄文で、17 は単節斜行縄文に綾絡文がみられる。原体はいずれもRLで ある。18~21 は撚糸文が、23~26 は条線がみられる。27~29 については磨滅が激しく文様、 地文については不明である。なお、9は沈線がめぐっている。



第4図 千賀田遺跡第Ⅲ層出土遺物(1)



第5図 千賀田遺跡第Ⅲ層出土遺物 (2)

まとめ

- 1. 千賀田遺跡は雉子尾西岸の自然堤防上に立地している。
- 2. 基本層位第Ⅲ層は遺物を含んでおり、東西約85m、南北約115mの広がりがみられる。層の厚さは0~36cmである。
- 3. 出土した遺物には縄文土器があるが、同層としてとらえられた土器に縄文時代晩期中葉、 後葉と地点によって違う時期のものが存在することから、基本層位第Ⅲ層はさらに細分さ れる可能性が考えられる。
- 4. 遺跡の範囲は基本層位第Ⅲ層の広がりから東西約85m, 南北約115mと思われる。遺物の出土数はK~T-102~103区から非常に多く出土しているが,他の区からの出土数はそれほど多くはない。
- 5. 今回の調査では遺構は検出されなかった。

〈三代河原遺跡〉

三代河原遺跡ではトレンチを設定し調査を行なった。畑では耕作土の厚さは15~20 cmあり、これを取り除くと北側では以前丘陵斜面を削りとって畑にした際の整地層が広がっていたが、南側ではみられなかった。厚さは0~10 cmである。この層下はにぶい黄褐色土層で、風化した凝灰岩の粒を多く含んでいる。厚さは35~40 cmである。遺物は含んでいない。さらに掘り進めると黒褐色土層となる。この層は南側の方が厚く8~18 cmあり、遺物を含んでいる。この層の広がりを確認するためにさらに南側の桑畑にも調査区を設定した所この層は桑畑一体に広がっていることが確認された。この層下は暗褐色土層で、厚さは14~20 cmあり、遺物は含んでいない。

水田では水田耕作土直下から縄文土器、土師器が混在して出土しているが、耕作土下には砂層、礫層が広がっており、水田部分はかつて雉子尾川の氾濫原であることが確かめられた。

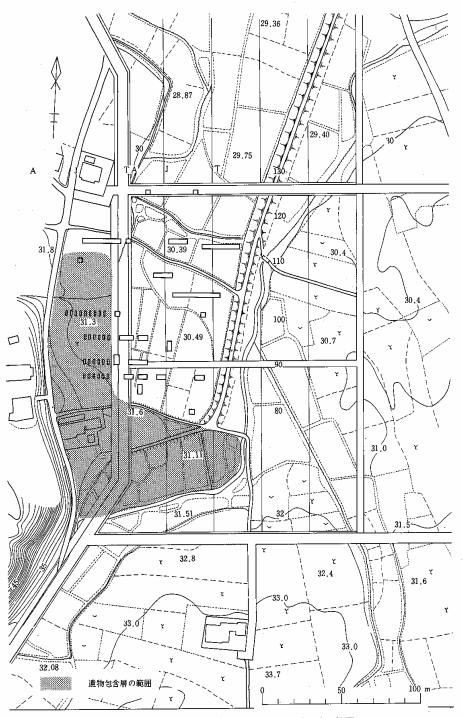
なお、基本的な層位について畑および桑畑が存在する丘陵端部についてのみまとめてみると 次の様になる。

第 I 層:にぶい黄褐色土層(厚さ 15~20 cm)

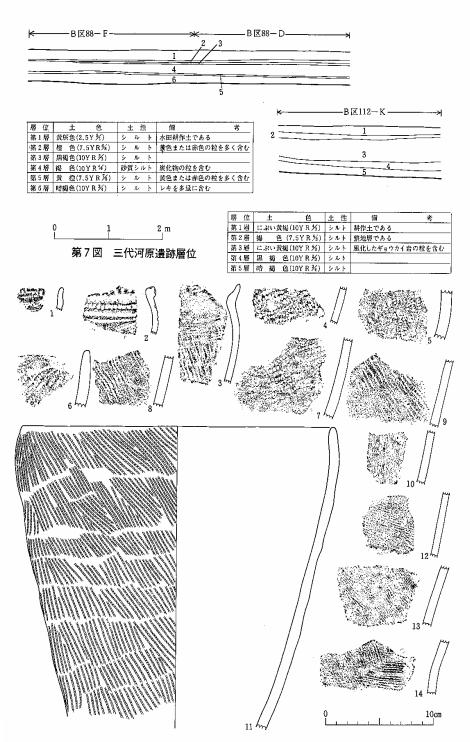
第Ⅲ層: 褐色土層 (厚さ 0~10 cm) 第Ⅲ層: にぶい黄褐色土層 (厚さ 35~40 cm)

第IV層:黒褐色土層 (厚さ 8~18 cm) 遺物を含んでいる。

第V層:暗褐色土層 (厚さ14~20 cm)



第6図 三代河原遺跡グリッド配置図及び遺跡の範囲



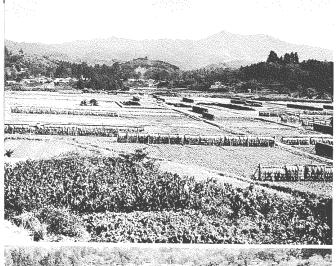
第8図 三代河原遺跡出土遺物

(出土遺物)

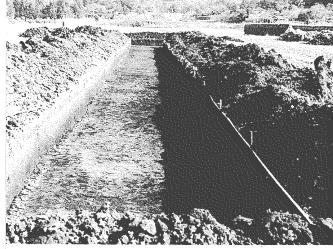
大部分が畑および桑畑の基本層位第IV層からの出土であり水田からの出土はほとんどない。出土遺物には縄文土器があるが、そのほとんどが小破片であり、全体の器形の判明する土器は1点しかない。1、2は深鉢形土器の口縁部破片である。1は口縁部わずかに外反、2は口縁部内弯する。いずれも数条の平行沈線が施文されており、沈線間には刺突が施されている。2は口縁部にも刺突が施文されている。時期は晩期後半と思われる。3~14は深鉢形土器で、11はほぼ完形だが、他は口縁部と体部の破片である。11は体部から口縁部にかけて外傾、口縁部わずかに内弯する。3、6は口縁部破片であるが、3は口縁部外反、6は口縁部外傾する。3~9は単節斜行縄文が、10~14は撚糸文が施文されている。

まとめ

- 1. 三代河原遺跡は雉子尾川西岸の自然堤防および丘陵端部に立地している。
- 2. 遺物は現在野菜畑と桑畑となっている丘陵端部の基本層位第IV層からの出土が大半で、水田となっている自然堤防部からはほとんど出土しなかった。
- 3. 出土した遺物には縄文土器があり、時期は縄文時代晩期後半に属するものと思われる。
- 4. 遺跡の範囲は基本層位第IV層の広がりから東西約85m, 南北約115mにわたり, 野菜畑の一部と桑畑一体に広がるものと思われる。なお, 層の厚さは8~18 cmである。
- 5. 今回の調査では遺構は検出されなかった。



千賀田遺跡遠景 (西側から)

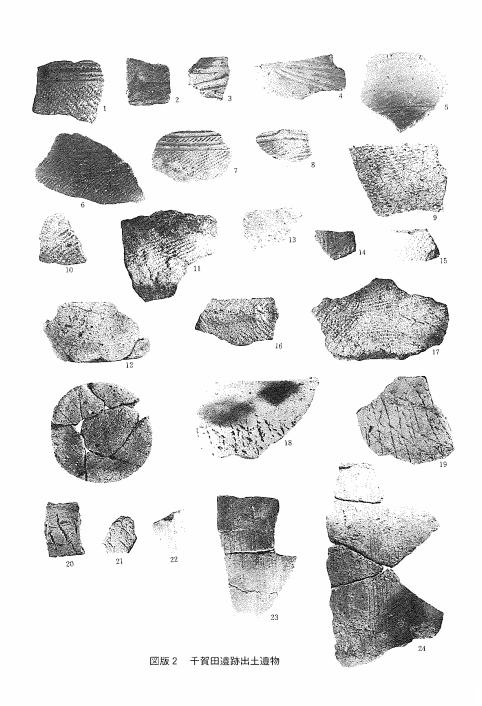


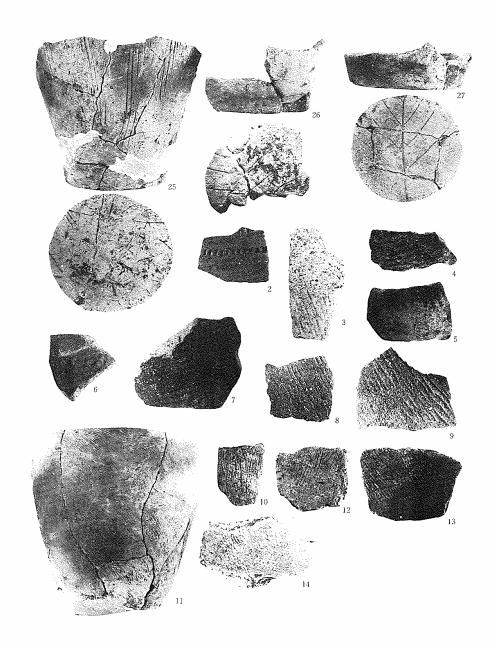
トレンチ発掘状況 (西側から)



遺物出土状況 (東側から)

図版 1





図版 3 千賀田遺跡, 三代河原遺跡出土遺物